

NetBackup™ Web UI Kubernetes 管理者ガイド

リリース 10.1

VERITAS™

最終更新日: 2022-10-28

法的通知と登録商標

Copyright © 2022 Veritas Technologies LLC. All rights reserved.

Veritas、Veritas ロゴ、NetBackup は、Veritas Technologies LLC または関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。その他の会社名、製品名は各社の登録商標または商標です。

この製品には、Veritas 社がサードパーティへの帰属を示す必要があるサードパーティ製ソフトウェア（「サードパーティ製プログラム」）が含まれる場合があります。サードパーティプログラムの一部は、オープンソースまたはフリーソフトウェアライセンスで提供されます。本ソフトウェアに含まれる本使用許諾契約は、オープンソースまたはフリーソフトウェアライセンスでお客様が有する権利または義務を変更しないものとします。このVeritas製品に付属するサードパーティの法的通知文書は次の場所から入手できます。

<https://www.veritas.com/about/legal/license-agreements>

本書に記載されている製品は、その使用、コピー、頒布、逆コンパイルおよびリバースエンジニアリングを制限するライセンスに基づいて頒布されます。Veritas Technologies LLC からの書面による許可なく本書を複製することはできません。

本書は、現状のままで提供されるものであり、その商品性、特定目的への適合性、または不侵害の暗黙的な保証を含む、明示的あるいは暗黙的な条件、表明、および保証はすべて免責されるものとします。ただし、これらの免責が法的に無効であるとされる場合を除きます。Veritas Technologies LLC およびその関連会社は、本書の提供、パフォーマンスまたは使用に関連する付随的または間接的損害に対して、一切責任を負わないものとします。本書に記載の情報は、予告なく変更される場合があります。

ライセンスソフトウェアおよび文書は、FAR 12.212 に定義される商用コンピュータソフトウェアと見なされ、Veritas がオンプレミスまたはホスト型サービスとして提供するかを問わず、必要に応じて FAR 52.227-19 「商用コンピュータソフトウェア - 制限される権利 (Commercial Computer Software - Restricted Rights)」、DFARS 227.7202 「商用コンピュータソフトウェアおよび商用コンピュータソフトウェア文書 (Commercial Computer Software and Commercial Computer Software Documentation)」およびそれらの後継の規制に定める制限される権利の対象となります。米国政府によるライセンス対象ソフトウェアおよび資料の使用、修正、複製のリリース、実演、表示または開示は、本使用許諾契約の条項に従ってのみ行われるものとします。

Veritas Technologies LLC
2625 Augustine Drive
Santa Clara, CA 95054

<http://www.veritas.com>

テクニカルサポート

テクニカルサポートはグローバルにサポートセンターを管理しています。すべてのサポートサービスは、サポート契約と現在のエンタープライズテクニカルサポートポリシーに応じて提供されます。サポート内容およびテクニカルサポートの利用方法に関する情報については、次の Web サイトにアクセスしてください。

<https://www.veritas.com/support>

次の URL で Veritas Account の情報を管理できます。

<https://my.veritas.com>

現在のサポート契約についてご不明な点がある場合は、次に示すお住まいの地域のサポート契約管理チームに電子メールでお問い合わせください。

世界共通 (日本を除く)

CustomerCare@veritas.com

日本

CustomerCare_Japan@veritas.com

マニュアル

マニュアルの最新バージョンがあることを確認してください。各マニュアルには、2 ページ目に最終更新日が記載されています。最新のマニュアルは、Veritas の Web サイトで入手できます。

<https://sort.veritas.com/documents>

マニュアルに対するご意見

お客様のご意見は弊社の財産です。改善点のご指摘やマニュアルの誤謬脱漏などの報告をお願いします。その際には、マニュアルのタイトル、バージョン、章タイトル、セクションタイトルも合わせてご報告ください。ご意見は次のアドレスに送信してください。

NB.docs@veritas.com

次の Veritas コミュニティサイトでマニュアルの情報を参照したり、質問したりすることもできます。

<http://www.veritas.com/community/>

Veritas Services and Operations Readiness Tools (SORT)

Veritas SORT (Service and Operations Readiness Tools) は、特定の時間がかかる管理タスクを自動化および簡素化するための情報とツールを提供する Web サイトです。製品によって異なりますが、SORT はインストールとアップグレードの準備、データセンターにおけるリスクの識別、および運用効率の向上を支援します。SORT がお客様の製品に提供できるサービスとツールについては、次のデータシートを参照してください。

https://sort.veritas.com/data/support/SORT_Data_Sheet.pdf

目次

第 1 章	NetBackup for Kubernetes の概要	6
	概要	6
	Kubernetes 用の NetBackup サポート機能	7
第 2 章	NetBackup Kubernetes Operator の配備と構成	9
	NetBackup Kubernetes Operator でのサービスパッケージの配備	9
	Kubernetes Operator の配備のためのポート要件	12
	NetBackup Kubernetes Operator のアップグレード	13
	NetBackup Kubernetes Operator の削除	13
	NetBackup Kubernetes datamover の構成	14
	NetBackup スナップショット操作の設定を行う	14
	短縮名の付いた NetBackup サーバーのトラブルシューティング	25
	イメージグループの管理	27
	イメージの有効期限について	27
	イメージコピーについて	28
第 3 章	NetBackup Kubernetes Operator での証明書の 配備	29
	Kubernetes Operator での証明書の配備	29
	ホスト ID ベースの証明書操作の実行	30
	ECA 証明書操作の実行	36
	証明書の種類の識別	42
第 4 章	Kubernetes 資産の管理	45
	Kubernetes クラスタの追加	45
	設定を行う	46
	資産への保護の追加	49
第 5 章	Kubernetes インテリジェントグループの管理	50
	インテリジェントグループについて	50
	インテリジェントグループの作成	51
	インテリジェントグループの削除	53

	インテリジェントグループの編集	53
第 6 章	Kubernetes 資産の保護	55
	インテリジェントグループの保護	55
	インテリジェントグループからの保護の削除	56
	バックアップスケジュールの構成	56
	バックアップオプションの構成	58
	バックアップの構成	59
	自動イメージレプリケーション (AIR) と複製の構成	61
	ストレージユニットの構成	64
第 7 章	Kubernetes 資産のリカバリ	66
	リカバリポイントの検索と検証	66
	スナップショットからのリストア	67
	バックアップコピーからのリストア	70
第 8 章	Kubernetes の問題のトラブルシューティング	74
	プライマリサーバーのアップグレード時のエラー: NBCheck が失敗する	74
	古いイメージのリストア時のエラー: 操作が失敗する	75
	永続ボリュームのリカバリ API でのエラー	75
	リストア中のエラー: ジョブの最終状態で一部が失敗していると表示される	76
	同じ名前空間でのリストア時のエラー	76
	datamover ボッドが Kubernetes のリソース制限を超過	76
	リストア時のエラー: 高負荷のクラスターでジョブが失敗する	78
	特定のクラスター用に作成されたカスタムの Kubernetes の役割でジョブを表示できない	79
	OperatorHub からインストールされたアプリケーションのリストア時に、選択されていない空の PVC が Openshift によって作成される	80

NetBackup for Kubernetes の概要

この章では以下の項目について説明しています。

- [概要](#)
- [Kubernetes 用の NetBackup サポート機能](#)

概要

NetBackup Web UI は、名前空間の形式で、Kubernetes アプリケーションのバックアップとリストアの機能を提供します。Kubernetes クラスタ内の保護可能な資産は NetBackup 環境内で自動的に検出され、管理者は必要なスケジュール、バックアップ、保持の各設定を含む 1 つ以上の保護計画を選択できます。

NetBackup Web UI では、次の操作を実行できます。

- 保護のための Kubernetes クラスタの追加
- 検出された名前空間の表示
- 役割の権限の管理
- リソース制限を設定してインフラとネットワークの負荷を最適化
- Kubernetes 資産を保護するための保護とインテリジェントグループの管理
- 名前空間と永続ボリュームのリストア
- バックアップおよびリストア操作の監視
- イメージの有効期限、イメージのインポートおよびイメージのコピー操作

Kubernetes 用の NetBackup サポート機能

表 1-1 NetBackup for Kubernetes

機能	説明
NetBackup RBAC (役割ベースのアクセス制御) との統合	NetBackup Web UI は RBAC の役割を提供し、どの NetBackup ユーザーが NetBackup の Kubernetes 操作を管理できるかを制御します。ユーザーは Kubernetes 操作を管理するために NetBackup 管理者である必要はありません。
ライセンス	容量ベースのライセンス
保護計画	次の利点があります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 単一の保護計画を使用して、複数の Kubernetes 名前空間を保護します。複数のクラスタに資産を分散できます。 ■ Kubernetes 資産を保護するために、Kubernetes コマンドを知る必要はありません。
Kubernetes 資産のインテリジェントな管理	NetBackup は自動的に、Kubernetes クラスタ内の名前空間、永続ボリューム、永続ボリューム要求などを検出します。また、手動検出を実行できます。資産が検出されると、Kubernetes 作業負荷管理者は、資産を保護するために 1 つ以上の保護計画を選択できます。
Kubernetes 固有のクレデンシャル	クラスタの認証と管理に使用する Kubernetes サービスアカウント。
検出 <ul style="list-style-type: none"> ■ 完全検出 ■ 増分検出 	<p>[今すぐ検出 (Discovery now)] オプションを使用した検出は常に完全検出です。</p> <p>新しいクラスタが NetBackup に追加されたときの検出は常に完全検出です。</p> <p>Kubernetes クラスタが追加されると、自動検出サイクルがトリガされ、Kubernetes クラスタで利用可能なすべての資産が検出されます。その日最初の自動検出は完全検出で、以降の自動検出は増分検出です。</p>
バックアップ機能 <ul style="list-style-type: none"> ■ スナップショットのみのバックアップ ■ スナップショットからのバックアップ 	<p>バックアップでは次の機能を利用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ バックアップは、NetBackup サーバーによって中央サイトから完全に管理されます。管理者は、さまざまな Kubernetes クラスタで、名前空間の自動的な無人バックアップをスケジュールできます。 ■ NetBackup Web UI は、1 つのインターフェースからの名前空間のバックアップとリストアをサポートします。 ■ 完全バックアップのバックアップスケジュールの構成。 ■ 手動バックアップとスナップショットのみのバックアップ。 ■ バックアップのパフォーマンスを向上させるための各クラスタのリソースのスロットル。 ■ NetBackup はスナップショット方式を使用して Kubernetes 名前空間のバックアップを実行し、リカバリ時間目標を短縮できます。

機能	説明
リストア機能 <ul style="list-style-type: none"> ■ スナップショットからのリストア ■ バックアップコピーからのリストア 	リストアでは次の機能を利用できます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Kubernetes 名前空間と永続ボリュームを異なる場所にリストアします。 ■ バックアップコピーからのリストアを使用して、異なる Kubernetes クラスタープレーヤーにリストアします。
クライアント側のデータ重複排除のサポート	<p>Kubernetes でクライアント側のデータ重複排除のサポート機能が有効になっています。</p> <p>詳しくは、『<i>NetBackup™ 重複排除ガイド</i>』の「クライアント側の重複排除について」セクションを参照してください。</p>

NetBackup Kubernetes Operator の配備と構成

この章では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup Kubernetes Operator](#) でのサービスパッケージの配備
- [Kubernetes Operator](#) の配備のためのポート要件
- [NetBackup Kubernetes Operator](#) のアップグレード
- [NetBackup Kubernetes Operator](#) の削除
- [NetBackup Kubernetes datamover](#) の構成
- [NetBackup](#) スナップショット操作の設定を行う
- 短縮名の付いた [NetBackup](#) サーバーのトラブルシューティング
- イメージグループの管理

NetBackup Kubernetes Operator でのサービスパッケージの配備

[NetBackup Kubernetes Operator](#) を配備する前に、[Helm Chart](#) をインストールし、永続ボリューム用の領域を用意する必要があります。

[Helm](#) の最新バージョンをインストールするには、次のコマンドを実行します。

1. `#curl -k -fsSL -o get_helm.sh https://raw.githubusercontent.com/helm`
2. `#chmod +x get_helm.sh`
3. `#!/get_helm.sh`

[NetBackup](#) を配備する各クラスタにオペレータを配備する必要があります。

Helm Chart の構成

Helm Chart を使用して、NetBackup Kubernetes Operator を配備できます。

メモ: Helm Chart のアップグレードはサポートされていないため、新しい NetBackup プラグイン Helm Chart をインストールする必要があります。

新しいプラグインをインストールする前に、古いプラグインをアンインストールする必要があります。

新しい Helm Chart をインストールするには

- 1 古いプラグインをアンインストールするには、次のコマンドを実行します。
 - `helm uninstall <plugin-name> -n <namespace>`
- 2 新しいプラグインをインストールするには、次のコマンドを実行します。
 - `helm install <plugin-name> <chart-path> -n <namespace>`

Helm Chart とツリー構造のレイアウトを次に示します。

```
netbackupkops-helm-chart
```

```
├─ charts
├─ Chart.yaml
├─ templates
│   └─ deployment.yaml
└─ values.yaml
```

ディレクトリ構造:

```
tar --list -f netbackupkops-10.0.tar.gz
veritas_license.txt
netbackupkops-helm-chart/
netbackupkops-helm-chart/Chart.yaml
netbackupkops-helm-chart/Values.yaml
netbackupkops-helm-chart/.helmignore
netbackupkops-helm-chart/templates
netbackupkops-helm-chart/templates/development.yaml
netbackupkops-helm-chart/Charts/
```

NetBackup Kubernetes Operator を配備するには:

- 1 ベリタスのサポート Web サイト (<https://www.veritas.com/content/support>) から tar パッケージをダウンロードします。
- 2 ホームディレクトリにパッケージを抽出します。netbackupkops-helm-chart フォルダは、ホームディレクトリに存在する必要があります。

- 3 すべてのクラスタコンテキストを一覧表示するには、コマンド `kubectl config get-contexts` を実行します。
- 4 オペレータサービスを配備するクラスタに切り替えるには、次のコマンドを実行します。

```
kubectl config use-context <cluster-context-name>
```
- 5 現在のディレクトリをホームディレクトリに変更するには、コマンド `cd ~` を実行します。
- 6 プライベート Docker レジストリを使用している場合は、この手順の指示に従って、**NetBackup** 名前空間に **Secret** `nb-docker-cred` を作成します。それ以外の場合は、次の手順にスキップします。
 - プライベート Docker レジストリにログオンするには、コマンド `docker login -u <user name><repo-name>` を実行します。
ログイン後、認証トークンを含む `config.json` ファイルが作成または更新されます。`config.json` ファイルを表示するには、コマンド `cat ~/.docker/config.json` を実行します。
出力は次のようになります。

```
{
  "auths": {
    "https://index.docker.io/v1/": {
      "auth": "c3R...zE2"
    }
  }
}
```
 - **NetBackup** 名前空間で `netbackupkops-docker-cred` という名前の **Secret** を作成するには、次のコマンドを実行します。

```
kubectl create secret generic netbackupkops-docker-cred ¥
--from-file=.dockerconfigjson=.docker/config.json ¥
--type=kubernetes.io/dockerconfigjson -n netbackup
```

Secret を作成する名前空間は任意に指定できます。
 - **NetBackup** 名前空間で **Secret** `netbackupkops-docker-cred` が作成されたかどうかを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
kubectl get secrets -n netbackup
```

- 7 Docker キャッシュにイメージをロードして Docker イメージリポジトリにイメージをプッシュするには、次のコマンドを実行します。

```
docker load -i <name of the tar file>./  
  
docker tag <image name:tag of the loaded image>  
  
<repo-name/image-name:tag-name>  
  
docker push <repo-name/image-name:tag-name>
```

- 8 テキストエディタで `netbackupkops-helm-chart/values.yaml` ファイルを開き、*manager* セクションの *image* の値を、イメージ名とタグ *repo-name/image-name:tag-name* に置き換えて、ファイルを保存します。

- 9 NetBackup Kubernetes Operator サービスを配備するには、次のコマンドを実行します。

```
helm install <release name of the deployment>  
./netbackupkops-helm-chart -n <namespace which runs NetBackup  
operator service>
```

例: `helm install veritas-netbackupkops ./netbackupkops-helm-chart -n netbackup`

- 必要に応じて配備のリリース名を変更できます。
- NetBackup オペレータサービスと NetBackup を実行する名前空間を指定するには、`-n` オプションが必要です。

- 10 配備の状態を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
helm list -n <namespace which runs NetBackup operator service >
```

例:

```
helm list -n netbackup
```

- 11 リリース履歴を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
helm history veritas-netbackupkops -n  
<namespace which runs NetBackup operator service>.
```

例:

```
helm history veritas-netbackupkops -n netbackup
```

Kubernetes Operator の配備のためのポート要件

次の表は、Kubernetes Operator を配備するためのポート要件を示しています。さまざまなホストの間にファイアウォールが存在する場合は、必要な通信ポートを開く必要があります。

表 2-1 NetBackup Kubernetes クラスタ環境で開く必要があるポート

ソース	ポート番号	宛先
プライマリサーバー	TCP ポート 443	Kubernetes クラスタ
メディアサーバー	TCP ポート 443 (NetBackup 10.0 で採用)。	Kubernetes クラスタ
メモ: Kubernetes API サーバーのポートが 443 からデフォルト以外のポート (通常は 6443 または 8443) に変更されていないことを Kubernetes の構成で確認します。		
Kubernetes クラスタ	TCP ポート 443 (NetBackup バージョン 9.1 が該当、バージョン 10.0 以降は該当せず)。	プライマリサーバー
メモ: NetBackup Kubernetes Operator (KOps) と datamover ポッドの場合は追加要件があります (NetBackup 10.0 で採用)。		
Kubernetes クラスタ	TCP ポート 1556 (アウトバウンド)	プライマリサーバー
Kubernetes クラスタ	TCP ポート 1556 (アウトバウンド)	メディアサーバー
Kubernetes クラスタ	耐性ネットワークを使用している場合は TCP ポート 13724 (双方向)。	プライマリサーバーとメディアサーバー

NetBackup Kubernetes Operator のアップグレード

Helm コマンドを使用して NetBackup Kubernetes Operator の配備をアップグレードすることはできません。

NetBackup Kubernetes Operator の削除

クラスタから NetBackup Kubernetes Operator の配備を削除できます。

NetBackup Kubernetes Operator の配備は、古いバージョンからアップグレードできないため、新しいバージョンをインストールして古いバージョンを削除できます。

NetBackup Kubernetes Operator を削除すると、スナップショットメタデータもホストするメタデータボリュームが失われます。スナップショットがすでに実行されている場合、メタデータがないと、スナップショットコピーからのリストア操作は失敗します。

古いスナップショットを手動で削除する前に、関連付けられた Velero スナップショットを削除しないでください。

NetBackup 10.0 では、NetBackup 9.1 を使用して作成された Velero 管理スナップショットを期限切れにできません。バックアップイメージが NetBackup で期限切れになると、カタログは自動的にクリアされます。ただし、Kubernetes サーバー上のスナップショットは手動で削除する必要があります。

手動によるイメージの期限切れ操作について詳しくは、<https://www.veritas.com/content/support> を参照してください。

NetBackup Kubernetes datamover の構成

NetBackup Kubernetes 作業負荷の datamover を構成する必要があります。ご使用のリリースバージョンに対応した正しいバージョンの datamover イメージ `veritasnetbackup-datamover-10.0-0070.tar` をダウンロードセンターからダウンロードしてください。<https://www.veritas.com/content/support> を参照してください。

datamover を構成するには

- 1 Docker イメージレジストリに **datamover** イメージをプッシュするには、次のコマンドを実行します。

```
docker login -u <user name> <repo-name>
```
- 2 プロンプトでパスワードを入力します。ログイン済みの場合は、この手順をスキップします
- 3 `docker load -i <name of the datamover image file>` を実行します。
- 4 `docker tag <datamover image name:tag of the loaded datamover image> <repo-name/image-name:tag-name>` を実行します。
- 5 `docker push <repo-name/image-name:tag-name>`
- 6 プライマリサーバー名の **ConfigMap** で、イメージ値が手順 4 でプッシュした `<repo-name/image-name:tag-name>` に設定されていることを確認します。
configmap について詳しくは、p.19 の「スナップショットからのバックアップ操作とバックアップからのリストア操作の前提条件」を参照してください。

NetBackup スナップショット操作の設定を行う

実際のスナップショットからのバックアップ操作を実行する前に、Kubernetes Operator の配備でスナップショット操作を構成する必要があります。

1. CSI プラグインを指すストレージクラスを定義します。
2. CSI ドライバの詳細で構成される `VolumeSnapshotClass` クラスを定義します。

3. NetBackup を使用するボリュームスナップショットクラスにラベルを付けます。次のラベル `netbackup.veritas.com/default-csi-volume-snapshot-class=true` を追加します。

メモ: 永続ボリュームで構成される名前空間のスナップショットが失敗し、エラーメッセージ [Kubernetes 名前空間のスナップショットの作成に失敗しました。(Failed to create snapshot of the Kubernetes namespace.)] が表示されます。

スナップショット操作は、`volumesnapshotclass` ラベルが付いたドライバの有効なボリュームスナップショットクラスが見つからないなど、複数の原因によって失敗する場合があります。

4. メタデータ永続ボリュームのサイズ調整が必要です。Kubernetes Operator のデフォルトの永続ボリュームサイズは **10Gi** です。永続ボリュームサイズは構成可能です。プラグインを配備する前に、ストレージの値を **10Gi** からより大きい値に変更できます。これにより、`nbukops` ポッドには、そのポッドでマウントされた PVC のサイズが設定されます。

永続ボリューム要求は次のようになります。

```
apiVersion: v1
kind: PersistentVolumeClaim
metadata:
  labels:
    component: netbackup
    name: {{ .Release.Namespace }}-netbackupkops
    namespace: {{ .Release.Namespace }}
spec:
  accessModes:
  - ReadWriteOnce
  resources:
    requests:
      storage: 10Gi
```

- 新規インストール時に Helm Chart を構成する際、`netbackupkops-helm-chart` の `deployment.yaml` で PVC ストレージのサイズを変更できます。これにより、初期の PVC サイズが作成されます。
- インストール後、PVC サイズの更新 (ダイナミックボリューム拡張) は一部のストレージベンダーによってサポートされます。詳しくは、<https://kubernetes.io/docs/concepts/storage/persistent-volumes> を参照してください。

メモ: 永続ボリュームのデフォルトサイズは、データを失うことなく、より大きい値にサイズ変更できます。ボリュームの拡張をサポートするストレージプロバイダを追加することをお勧めします。

メモ: 構成値を取得するには、コマンド `kubectl get configmaps <namespace>-backup-operator-configuration -n <namespace> -o yaml > {local.file}` を実行します。

表 2-2 Kubernetes Operator でサポートされる、`<namespace>-backup-operator-configuration` の構成パラメータ

構成	説明	デフォルト値	指定可能な値
DaemonSets	Daemonset は、コントローラによって管理される、Kubernetes の動的オブジェクトです。各ノードに存在する必要がある、特定のポッドを表す目的の状態を設定できます。制御ループでポッドが侵害されると、現在の実際の状態と目的の状態が比較される場合があります。	true	true、false
Deployments	Kubernetes 作業負荷のための配備。	true	true、false
Pods	ポッドは、Kubernetes における最小の実行ユニットです。	true	true、false
ReplicaSets	レプリカセットにより、実行するポッドのレプリカ数が確保されます。これは、レプリケーションコントローラの代替と見なすことができます。	true	true、false
Secrets	Secret は、パスワード、トークン、クレデンシャルなどの重要なデータを含むオブジェクトです。	true	true、false

構成	説明	デフォルト値	指定可能な値
Services	Kubernetes で提供されるサービス。	true	true、false
namespace	Kubernetes Operator は名前空間に配備されます。	名前空間に指定された任意の名前。	NetBackup の名前空間。
cleanStaleCRDurationMinutes	古い CR をクリーニングするために CR ジョブが呼び出されてからの期間。古いカスタムリソースのクリーンアップジョブがトリガされてからの間隔。	24 時間	1440 分
ttlCRDurationMinutes	TTL CR の期間	分	30240 分
livenessProbeInitialDelay	精査の初期遅延期間。	分	60 分
livenessProbePeriodSeconds	精査の期間。	秒	80 秒
checkNbcertdaemonStatusDurationMinutes	NB 証明書デーモンの状態の期間。	分	1440 分

構成	説明	デフォルト値	指定可能な値
collectDataMoverLogs	<p>datamover ログの収集ではメモリ使用率が高くなるため、ポッドのデバッグ、トラブルシューティング、再起動を行う場合のみログを有効にすることをお勧めします。</p> <p>datamover のログを有効にする前に、NetBackup Kubernetes ポッド用のメモリ上限を 2 GB 以上に増やしてください。デバッグまたはトラブルシューティングの完了後は、以前の値またはデフォルト値にリセットできます。</p> <p>メモ: 失敗したジョブの場合にのみ、datamover ログを収集するための詳細なサポートが提供されます。これにより、より詳細なレベルとして All/FailedOnly/Off が提供されます。</p>	Failed	All、Failed、None
maxRetentionDataMoverLogsInHours	datamover ログの最大保持期間。	24 時間	72 時間
maxRetentionDataMoverInHours	指定した時間より古い datamover リソースがすべて削除されます。	24 時間	24 時間
cleanStaleCertFilesDurationMinutes	古い証明書ファイルのクリーンアップジョブがトリガされてからの間隔。	60 分	1440 分
maxRetentionInDiscoveryCacheHours	検出キャッシュを保持する時間間隔を決定する時間。	24 時間	48 時間
pollingTimeoutInMinutes	期限切れになり失敗するまで再試行し続けるタイムアウトです。	15 分	15 分

構成	説明	デフォルト値	指定可能な値
pollingFrequencyInSecs	ポーリング間隔。	秒	5 秒
nbcertPrerequisiteDirectoryAndFiles	NBCA の前提条件。	証明書名	証明書名

スナップショットからのバックアップ操作とバックアップからのリストア操作の前提条件

1. **NetBackup** を使用するために有効なストレージクラスにラベルを付け、次のラベルを追加します。netbackup.veritas.com/default-csi-storage-class=true **NetBackup** のラベルが付いたストレージクラスが見つからない場合は、メタデータイメージのスナップショットからのバックアップジョブとリストアジョブが失敗し、エラーメッセージ [対象となるストレージクラスが見つかりません (*No eligible storage class found*)] が表示されます。

ストレージクラスにラベル付けするには、例に示されている次のコマンドを実行します。

例 1. コマンド # `oc get sc` を実行します。

名前	プロビジョナ
ocs-storagecluster-ceph-rbd (デフォルト)	openshift-storage.rbd.csi.ceph.com
ocs-storagecluster-ceph-rgw	openshift-storage.ceph.rook.io/bucket
ocs-storagecluster-cephfs	openshift-storage.cephfs.csi.ceph.com
openshift-storage.noobaa.io	openshift-storage.noobaa.io/obc
thin	kubernetes.io/vsphere-volume

再生利用ポリシー	ボリュームバインドモード	ボリュームの拡張を許可する	経過時間
削除	即時	True	2 日 2 時間
削除	即時	False	2 日 2 時間
削除	即時	True	2 日 2 時間
削除	即時	False	2 日 2 時間
削除	即時	False	19 時間

例 2. コマンド # `oc get sc ocs-storagecluster-ceph-rbd --show-labels` を実行します。

名前	プロビジョナ	再生利用ポリシー
ocs-storagecluster-ceph-rbd (デフォルト)	openshift-storage.rbd.csi.ceph.com	削除

ボリュームバインドモード	ボリュームの拡張を許可する	経過時間	ラベル
即時	True	2 日 2 時間	netbackup.veritas.com/default-csi-storage-class=true

例 3. コマンド # `oc label sc ocs-storagecluster-cephfs netbackup.veritas.com/default-csi-storage-class=true storageclass.storage.k8s.io/ocs-storagecluster-cephfs labeled` を実行します。

例 4. コマンド `oc get sc ocs-storagecluster-cephfs --show-labels` を実行します。

名前	プロビジョナ	再生利用ポリシー
ocs-storagecluster-cephfs	openshift-storage.cephfs.csi.ceph.com	削除

ボリュームバインドモード	ボリュームの拡張を許可する	経過時間	ラベル
即時	True	2 日 2 時間	netbackup.veritas.com/default-csi-storage-class=true

- NetBackup を使用するために有効なボリュームスナップショットクラスにラベルを付け、ラベル `netbackup.veritas.com/default-csi-volume-snapshot-class=true` を追加します。NetBackup のラベルが付いた `VolumeSnapshotClass` クラスが見つからない場合は、メタデータイメージのスナップショットからのバックアップジョブとリストアジョブが失敗し、エラーメッセージ `[Kubernetes 名前空間のスナップショットの作成に失敗しました (Failed to create snapshot of the Kubernetes namespace)]` が表示されます。

ボリュームスナップショットクラスにラベル付けするには、例に示されている次のコマンドを実行します。

例 1. コマンド # `oc get volumesnapshotclass` を実行します。

名前	ドライバ
ocs-storagecluster-cephfsplugin-snapclass	openshift-storage.cephfs.csi.ceph.com
ocs-storagecluster-rbdplugin-snapclass	openshift-storage.rbd.csi.ceph.com

削除ポリシー	経過時間
削除	2 日 2 時間
削除	2 日 2 時間

例 2. コマンド # `oc get volumesnapshotclass ocs-storagecluster-cephfsplugin-snapclass --show-labels` を実行します。

名前	ドライバ
ocs-storagecluster-cephfsplugin-snapclass	openshift-storage.cephfs.csi.ceph.com

削除ポリシー	経過時間
削除	2 日 2 時間

例 3. コマンド # `oc label volumesnapshotclass ocs-storagecluster-cephfsplugin-snapclass netbackup.veritas.com/default-csi-volume-snapshot-class=true` を実行します。

```
volumesnapshotclass.snapshot.storage.k8s.io/ocs-storagecluster-cephfsplugin-snapclass
labeled
```

例 4. コマンド # `oc get volumesnapshotclass ocs-storagecluster-cephfsplugin-snapclass --show-labels` を実行します。

名前	ドライバ
ocs-storagecluster-cephfsplugin-snapclass	openshift-storage.cephfs.csi.ceph.com

削除ポリシー	経過時間	ラベル
削除	2 日 2 時間	netbackup.veritas.com/default-csi-volume-snapshot-class=true

3. スナップショットからのバックアップ操作とバックアップコピーからのリストア操作を実行する各プライマリサーバーは、プライマリサーバーの名前を使用して個別の **ConfigMap** を作成する必要があります。

次の `configmap.yaml` の例では、

- `backupserver.sample.domain.com` と `mediaserver.sample.domain.com` は、NetBackup プライマリサーバーとメディアサーバーのホスト名です。
- `IP: 10.20.12.13` と `IP: 10.21.12.13` は、NetBackup プライマリサーバーとメディアサーバーの IP アドレスです。

```
apiVersion: v1
data:
  datamover.hostaliases: |
    10.20.12.13=backupserver.sample.domain.com
    10.21.12.13=mediaserver.sample.domain.com
  datamover.properties: |
    image=reg.domain.com/datamover/image:latest
  version: "1"
kind: ConfigMap
metadata:
  name: backupserver.sample.domain.com
  namespace: kops-ns
```

- `configmap.yaml` ファイルの詳細をコピーします。
 - テキストエディタを開き、`yaml` ファイルの詳細を貼り付けます。
 - その後、それに `yaml` ファイル拡張子を付けて、Kubernetes クラスタにアクセスできるホームディレクトリに保存します。
4. `datamover.properties: image=reg.domain.com/datamover/image:latest` に適切な `datamover` イメージを指定します。
 5. プライマリサーバーとプライマリサーバーに接続されているメディアサーバーで短縮名が使用されていて、`datamover` からのホストの解決が失敗している場合は、`datamover.hostaliases` を指定します。プライマリサーバーとメディアサーバーのすべてのホスト名と IP のマッピングを指定します。
 6. プライベート Docker レジストリを使用するには、「NetBackup Kubernetes Operator でのサービスパッケージの配備」セクションのポイント 6 の説明に従って、シークレットを作成します。

シークレットが作成されたら、`configmap.yaml` ファイルの作成中に次の属性を追加します。

- `datamover.properties: |`
- `image=repo.azurecr.io/netbackup/datamover:10.0.0049`

- `imagePullSecret=secret_name`
- 7. `configmap.yaml` ファイルを作成するには、コマンド `kubectl create -f configmap.yaml` を実行します。
- 8. Kubernetes Operator が短縮名に基づいてプライマリサーバーを解決できない場合
 - 証明書のフェッチ中に `[EXIT STATUS 8500: Web サービスとの接続が確立されませんでした (EXIT STATUS 8500: Connection with the web service was not established)]` というメッセージが表示された場合は、ホスト名の解決の状態を `nbcert` ログで確認します。
 - ホスト名の解決に失敗した場合は、次の手順を実行します。
`kops deployment.yaml` を更新し、配備に `hostAliases` を追加します。
 - 次の `hostAliases` の例では、
 - `backupserver.sample.domain.com` と `mediaserver.sample.domain.com` は、NetBackup プライマリサーバーとメディアサーバーのホスト名です。
 - `IP: 10.20.12.13` と `IP: 10.21.12.13` は、NetBackup プライマリサーバーとメディアサーバーの IP アドレスです。

```
hostAliases:  
- hostnames:  
  - backupserver.sample.domain.com  
  ip: 10.20.12.13  
- hostnames:  
  - mediaserver.sample.domain.com  
  ip: 10.21.12.13
```

`hostAliases` の例の詳細をコピーしてテキストエディタに貼り付け、配備で `hostAliases` に追加します。

メモ: `hostAliases` セクションは、デフォルトの

`./netbackupkops-helm-chart/templates/deployment.yaml` ファイルの 2104 行に追加する必要があります。

`hostAliases` の例:

```
2104 hostAliases;  
- ip:10.15.206.7  
hostnames:  
- lab02-linsvr-01.demo.sample.domain.com  
- lab02-linsvr-01  
- ip:10.15.206.8
```

```
hostnames:
- lab02-linsvr-02.demo.sample.domain.com
- lab02-linsvr-02
imagePullSecrets:
- name: {{ .values.netbackupKops.imagePullSecrets.name }}
```

9. 指紋と認証トークンを使用して **Secret** を作成します。
10. 証明書をフェッチするための **backupservercert** 要求を作成します。
詳しくは『NetBackup™ セキュリティおよび暗号化ガイド』を参照してください。

Kubernetes 作業負荷でサポートされる DTE クライアント設定

DTE_CLIENT_MODE オプションは、バックアップサーバー固有の **configmap** によって **datamover** に設定される移動中のデータの暗号化 (DTE) モードを指定します。バックアップイメージの移動中のデータの暗号化は、グローバル DTE モードとクライアント DTE モードに基づいて実行されます。

バックアップサーバー固有の **configmap** を更新し、DTE_CLIENT_MODE キーを追加します。このキーは次の値を取ることができます。

- AUTOMATIC
- ON
- OFF

DTE_CLIENT_MODE について詳しくは、『Veritas NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』の「クライアント用 DTE_CLIENT_MODE」のセクションを参照してください。

次に、DTE_CLIENT_MODE 設定を追加した **configmap** を示します。

```
apiVersion: v1
data:
  datamover.hostaliases: |
    10.20.12.13=backupserver.sample.domain.com
    10.21.12.13=mediaserver.sample.domain.com
  datamover.properties: |
    image=reg.domain.com/datamover/image:latest
    DTE_CLIENT_MODE=ON
  version: "1"
kind: ConfigMap
metadata:
  name: backupserver.sample.domain.com
  namespace: kops-ns
```


datamover プロパティのカスタマイズ

キーと値のペアをバックアップサーバー固有の configmap に渡すことによって、datamover プロパティをカスタマイズできます。

表 2-3 datamover のプロパティ

キー名	指定可能な値
VXMS_VERBOSE	範囲: [0,99]
VERBOSE	範囲: [0,5]
DTE_CLIENT_MODE	<ul style="list-style-type: none">■ AUTOMATIC■ ON■ OFF

configmap を更新するには、次のようにキーと値のペアを追加します。

```
apiVersion: v1
data:
  datamover.properties: |
    image=reg.domain.com/datamover/image:latest
    VERBOSE=5
    DTE_CLIENT_MODE=OFF
    VXMS_VERBOSE=5
  version: "1"
kind: ConfigMap
metadata:
  name: backupserver.sample.domain.com
  namespace: kops-ns
```

短縮名の付いた NetBackup サーバーのトラブルシューティング

- 1 NetBackup Kubernetes Operator が短縮名を基にバックアップサーバーまたはメディアサーバーを解決できない場合は、次の手順を実行します。
 - 証明書のフェッチ中に **[EXIT STATUS 8500: Web サービスとの接続が確立されませんでした (EXIT STATUS 8500: Connection with the web service was not established)]** というメッセージが表示された場合。次に、ホスト名解決が成功したかどうかを nbcert ログから確認します。失敗した場合は、次の手順を実行します。

- **Kubernetes Operator** の `deployment.yaml` を更新し、その配備に `hostAliases` を追加します。
- 次の `hostAliases` の例では、
 - `backupserver.sample.domain.com` と `mediaserver.sample.domain.com` は、NetBackup プライマリサーバーとメディアサーバーのホスト名です。
 - `IP: 10.20.12.13` と `IP: 10.21.12.13` は、NetBackup プライマリサーバーとメディアサーバーの IP アドレスです。

```
hostAliases:
- hostnames:
  - backupserver.sample.domain.com
  ip: 10.20.12.13
- hostnames:
  - mediaserver.sample.domain.com
  ip: 10.21.12.13
```

`hostAliases` の例の詳細をコピーしてテキストエディタに貼り付け、配備で `hostAliases` に追加します。

2 `datamover` がバックアップサーバーまたはメディアサーバーの短縮名を解決できない場合。この問題を解決するには、次の手順を実行します。

- バックアップサーバー名を使用して **ConfigMap** を作成します。
- `datamover.hostaliases` フィールドを追加し、ホスト名に IP アドレスをマップします。
- 次の `configmap.yaml` の例では、
 - `backupserver.sample.domain.com` と `mediaserver.sample.domain.com` は、NetBackup プライマリサーバーとメディアサーバーのホスト名です。
 - `IP: 10.20.12.13` と `IP: 10.21.12.13` は、NetBackup プライマリサーバーとメディアサーバーの IP アドレスです。

```
apiVersion: v1

data:
  datamover.hostaliases: |
    10.20.12.13=backupserver.sample.domain.com
    10.21.12.13=mediaserver.sample.domain.com
  datamover.properties: |
    image=reg.domain.com/datamover/image:latest
  version: "1"
kind: ConfigMap
metadata:
```

```
name: backupserver.sample.domain.com
namespace: kops-ns
```

- configmap.yaml ファイルの詳細をコピーします。
- テキストエディタを開き、yaml ファイルの詳細を貼り付けます。
- その後、それに yaml ファイル拡張子を付けて、Kubernetes クラスタにアクセスできるホームディレクトリに保存します。
- configmap.yaml ファイルを作成するには、コマンド `kubectl create -f ConfigMap.yaml` を実行します。

イメージグループの管理

各 Kubernetes リカバリポイントに対して、イメージグループが作成されます。イメージグループには、名前空間内の対象永続ボリューム要求の数に応じて、複数のイメージが含まれる場合があります。

メタデータに対して個別のイメージが作成され、永続ボリューム要求ごとに 1 つのイメージが作成されます。

リカバリポイントの詳細 API は、イメージグループのすべてのバックアップ ID、リソース名、コピー完了状態についての詳細を取得するために使用します。

Kubernetes 作業負荷に対するスナップショットからのバックアップ操作をサポートするために、単一の名前空間に対して複数のバックアップイメージが作成され、スナップショットからのバックアップが実行されます。

Kubernetes のバックアップ操作では、すべての永続ボリュームに対して個別のバックアップイメージが作成されます。特定の操作 (リストア、削除、インポートなど) を正常に実行するには、作成されたすべてのイメージをグループ化する必要があります。

イメージの有効期限について

期限切れのイメージが占有するストレージ領域を再利用するには、それらのイメージを削除する必要があります。

イメージの有効期限に関連した重要なポイントを次に示します。

複数のイメージで構成されるリカバリポイントの場合:

- イメージグループ内の 1 つのイメージを期限切れにしても、残りのイメージの有効期限が自動的に切れることはありません。イメージグループ内のすべてのイメージを明示的に期限切れにする必要があります。
- いくつかのイメージを期限切れにした場合、リカバリポイントは不完全になります。リカバリポイントが不完全な場合、リストア操作はサポートされません。

- いずれかのイメージの有効期限を変更した場合は、残りのイメージの有効期限を変更する必要があります。そうしないと、リカバリポイントに対応するイメージの有効期限にずれが生じ、ある時点でリカバリポイントが不完全になります。

イメージのインポートについて

Kubernetes のリカバリポイントは、複数のイメージで構成されている場合があります。リストア操作を実行するには、リカバリポイントに対応するすべてのイメージをインポートする必要があります。そうしないと、リカバリポイントは不完全とマークされ、リストアは実行されません。

詳しくは、『NetBackup™ 管理者ガイド Vol. 1』の「バックアップイメージのインポートについて」セクションを参照してください。

イメージコピーについて

イメージコピーは、次の 2 種類のバックアップ操作で作成できます。

1. スナップショットはデフォルトのコピーで、コピー番号 1 としてマークされます。
2. スナップショットからのバックアップはコピー番号 2 としてマークされます。

任意の今すぐバックアップ操作またはスケジュールバックアップがトリガされるたびに、スナップショットが作成されます。ただし、[スナップショットからのバックアップ (Backup from snapshot)]は、保護計画の作成時に[スナップショットからのバックアップ (Backup from snapshot)]オプションが選択されているかどうかによって左右されるため、任意です。

イメージグループは、メタデータの資産のイメージや永続ボリューム要求 (PVC) で構成されます。各コピーには、名前空間用に 1 つのイメージ、名前空間に存在する各 PVC 用に 1 つのイメージが含まれます。

リカバリポイントの詳細 API を使用して、イメージのコピー完了状態を識別します。この API では、それぞれのコピーに存在するすべてのバックアップ ID とリソース名も詳細に示されます。不完全なイメージコピーから資産をリストアしようとするエラーが発生するため、イメージコピーが完全な状態か不完全な状態かはリストア機能に役立ちます。

不完全なイメージコピー

不完全なイメージの条件を次に示します。

1. スナップショットジョブまたはスナップショットからのバックアップジョブが進行中の場合、対応するコピーが不完全なコピーとして表示されます。
2. PVC のバックアップ処理が失敗すると、コピーは不完全としてマークされます。
3. コピーの子イメージ (複数の子を含む) が期限切れになると、コピーは不完全としてマークされます。

NetBackup Kubernetes Operator での証明書の配備

この章では以下の項目について説明しています。

- [Kubernetes Operator](#) での証明書の配備
- [ホスト ID ベースの証明書操作の実行](#)
- [ECA 証明書操作の実行](#)
- [証明書の種類の識別](#)

Kubernetes Operator での証明書の配備

`datamover` と NetBackup メディアサーバー間で安全に通信するために証明書を配備する必要があります。

メモ: スナップショットからのバックアップ操作とバックアップからのリストア操作を実行する前に、証明書を配備する必要があります。

`datamover` 通信でサポートされる証明書

`datamover` は、NetBackup 環境内のデータ移動を容易にし、TLS (Transport Layer Security) を介してメディアサーバーと通信します。詳しくは、『NetBackup™ セキュリティおよび暗号化ガイド』の「NetBackup での安全な通信について」セクションを参照してください。`datamover` が通信するためには、ホスト ID ベースの証明書、または NetBackup プライマリサーバーによって発行され、ECA が署名した証明書が必要です。NBCA

(NetBackup 認証局) または ECA (外部認証局) モードで証明書配備操作を実行できるように、新しいカスタムリソース定義 **BackupServerCert** が導入されました。

カスタムリソースの指定は次のようになります。

```
apiVersion: netbackup.veritas.com/v1
kind: BackupServerCert
metadata:
  name: backupservercert-sample-nbca
  namespace: kops-ns
spec:
  clusterName: cluster.sample.com:port
  backupServer: primary.server.sample.com
  certificateOperation: Create | Update | Remove
  certificateType: NBCA | ECA
  nbcaAttributes:
    nbcaCreateOptions:
      secretName: "Secret name consists of token and fingerprint"
    nbcaUpdateOptions:
      secretName: "Secret name consists of token and fingerprint"
      force: true | false
    nbcaRemoveOptions:
      hostID: "hostId of the nbca certificate. You can view on
Netbackup UI"
  ecaAttributes:
    ecaCreateOptions:
      ecaSecretName: "Secret name consists of cert, key, passphrase,
cacert"
      copyCertsFromSecret: true | false
      isKeyEncrypted: true | false
    ecaUpdateOptions:
      ecaCrlCheck: DISABLE | LEAF | CHAIN
      ecaCrlRefreshHours: [0,4380]
```

ホスト ID ベースの証明書操作の実行

プライマリサーバーが NBCA モードで構成されていることを確認します。NBCA モードがオンかどうかを確認するには、コマンド `/usr/opensv/netbackup/bin/nbcertcmd -getSecConfig -caUsage` を実行します。

出力は次のようになります。

NBCA: ON
 ECA: OFF

ホスト ID ベースの証明書の指定は次のようになります。

```
apiVersion: netbackup.veritas.com/v1
kind: BackupServerCert
metadata:
  name: backupservercert-sample
  namespace: kops-ns
spec:
  clusterName: cluster.sample.com:port
  backupServer: primaryserver.sample.domain.com
  certificateOperation: Create | Update | Remove
  certificateType: NBCA
  nbcaAttributes:
    nbcaCreateOptions:
      secretName: "Secret name consists of token and fingerprint"
    nbcaUpdateOptions:
      secretName: "Secret name consists of token and fingerprint"
      force: true
    nbcaRemoveOptions:
      hostID: "hostId of the nbca certificate. You can view on
Netbackup UI"
```

表 3-1 ホスト ID ベースの証明書操作

操作形式	オプションとコメント
作成 (Create)	secretName: トークンと指紋を含む Secret の名前。
削除 (Remove)	hostID: NBCA 証明書のホスト ID。
更新 (Update)	secretName: トークンと指紋を含む Secret の名前。

Kubernetes Operator 用ホスト ID ベースの証明書の作成

次の手順を使用して、Kubernetes Operator 用にホスト ID ベースの証明書を作成できます。

Kubernetes Operator 用ホスト ID ベースの証明書を作成するには

- 1 バックアップサーバーで、次のコマンドを実行し、SHA-256 指紋を取得します。

```
/usr/opensv/netbackup/bin/nbcertcmd -listCACertDetails
```

- 2 認証トークンを作成するには、『NetBackup™ セキュリティおよび暗号化ガイド』の「認証トークンの作成」を参照してください。
- 3 再発行トークンを作成するには、必要に応じて、『NetBackup™ セキュリティおよび暗号化ガイド』の「再発行トークンの作成」を参照してください。
- 4 トークンと指紋を使用して **Secret** を作成します。
- 5 セキュリティレベルに関係なく必須のため、トークンを指定します。

Token-fingerprint-secret.yaml は次のようになります。

```
apiVersion: v1
kind: Secret
metadata:
  name: secret-name
  namespace: kops-ns
type: Opaque
stringData:
  token: "Authorization token | Reissue token"
  fingerprint: "SHA256 Fingerprint"
```

- Token-fingerprint-secret.yaml ファイルのテキストをコピーします。
- テキストエディタを開き、yaml ファイルのテキストを貼り付けます。
- その後、そのテキストに **yaml** ファイル拡張子を付けて、**Kubernetes** クラスタにアクセスできるホームディレクトリに保存します。

- 6 Token-fingerprint-secret.yaml ファイルを作成するには、コマンド `kubectl create -f Token-fingerprint-secret.yaml` を実行します。

- 7 nbcaCreateOptions を使用して

backupservercert オブジェクトを作成し、**Secret** 名を指定します。

nbca-create-backupservercert.yaml は次のようになります。

```
apiVersion: netbackup.veritas.com/v1
kind: BackupServerCert
metadata:
  name: backupserver-nbca-create
  namespace: kops-ns
spec:
  clusterName: cluster.sample.com:port
```



```
backupServer: backupserver.sample.domain.com
certificateOperation: Create
certificateType: NBCA
nbcaAttributes:
  nbcaCreateOptions:
    secretName: nbcaSecretName with token and fingerprint
```

- nbca-create-backupservercert.yaml ファイルのテキストをコピーします。
 - テキストエディタを開き、yaml ファイルのテキストを貼り付けます。
 - その後、そのテキストに yaml ファイル拡張子を付けて、Kubernetes クラスタにアクセスできるホームディレクトリに保存します。
- 8 nbca-create-backupservercert.yaml ファイルを作成するには、コマンド `kubectl create -f nbca-create-backupservercert.yaml` を実行します。
- 9 証明書が作成されたら、カスタムリソースの状態を確認します。カスタムリソースの状態が正常の場合は、スナップショットからのバックアップジョブを実行できます。

メモ: スナップショットからのバックアップ操作またはバックアップコピーからのリストア操作を開始する前に、BackupServerCert カスタムリソースの状態が正常であることを確認する必要があります。

メモ: ホスト ID ベースの証明書を更新するには、NetBackup のホスト ID 証明書で、24 時間後に更新が予定されているかどうかを確認します。証明書は、有効期限の 180 日 (6 カ月) 前に自動的に更新されます。

メモ: NetBackup プライマリサーバーのクロックと NetBackup Kubernetes Operator のクロックが同期しているかどうかを確認します。CheckClockSkew のエラーについて詳しくは、『NetBackup™ セキュリティおよび暗号化ガイド』の「証明書の有効期間に対するクロックスキューの意味」セクションを参照してください。

Kubernetes Operator からのプライマリサーバー証明書の削除

プライマリサーバーがバックアップおよびリストア操作の実行に使用されていない場合は、そのサーバーから証明書を削除できます。

Kubernetes Operator からプライマリサーバー証明書を削除するには

1 NetBackup Web UI にログオンし、削除する証明書のホスト ID を取得します。

証明書のホスト ID を取得するには、『NetBackup™ セキュリティおよび暗号化ガイド』の「ホスト ID ベースの証明書の詳細の表示」セクションを参照してください。

2 操作形式を削除に設定して `backupservercert` を作成します。

`nbca-remove-backupservercert.yaml` ファイルは次のようになります。

```
apiVersion: netbackup.veritas.com/v1
kind: BackupServerCert
metadata:
  name: backupserver-nbca-domain.com
  namespace: kops-ns
spec:
  clusterName: cluster.sample.com:port
  backupServer: backupserver.sample.domain.com
  certificateOperation: Remove
  certificateType: NBCA
  nbcaAttributes:
    nbcaRemoveOptions:
      hostID: nbcahostID
```

- `nbca-remove-backupservercert.yaml` ファイルのテキストをコピーします。
- テキストエディタを開き、`yaml` ファイルのテキストを貼り付けます。
- その後、そのテキストに `yaml` ファイル拡張子を付けて、Kubernetes クラスタにアクセスできるホームディレクトリに保存します。

3 `nbca-remove-backupservercert.yaml` ファイルを作成するには、コマンド `kubectl create -f nbca-remove-backupservercert.yaml` を実行します。

4 証明書を無効にするには、『NetBackup™ セキュリティおよび暗号化ガイド』の「ホスト ID ベースの証明書の無効化」セクションを参照してください。

メモ: `nbca-remove-backupservercert.yaml` が適用されると、証明書は Kubernetes Operator のローカル証明書ストアから削除されます。ただし、まだ NetBackup データベースには存在し、有効なままです。したがって、証明書を無効にする必要があります。

プライマリサーバー証明書の更新

証明書が読み取り可能で、Kubernetes Operator に存在することを前提に、証明書を更新するシナリオを次に示します。

NetBackup Kubernetes Operator に存在する証明書が無効化されている場合は、更新操作を行って証明書を再発行できます。この問題を解決するには、サーバー証明書を更新するか、サーバー証明書を削除して新しい証明書を作成します。

メモ: 証明書の更新操作が失敗した場合は、最初に証明書を削除してから新しい証明書を作成する必要があります。

Kubernetes Operator でプライマリサーバー証明書を更新するには

1 更新操作を行って backupservercert オブジェクトを作成します。

nbca-update-backupservercert.yaml ファイルは次のようになります。

```
apiVersion: netbackup.veritas.com/v1
kind: BackupServerCert
metadata:
  name: backupserver-nbca-update
  namespace:kops-ns
spec:
  clusterName: cluster.sample.com:port
  backupServer: backupserver.sample.domain.com
  certificateOperation: Update
  certificateType: NBCA
  nbcaAttributes:
    nbcaUpdateOptions:
      secretName: "Name of secret containing
token and fingerprint"
      force: true
```

- nbca-update-backupservercert.yaml ファイルのテキストをコピーします。
- テキストエディタを開き、yaml ファイルのテキストを貼り付けます。
- その後、そのテキストに yaml ファイル拡張子を付けて、Kubernetes クラスタにアクセスできるホームディレクトリに保存します。

2 nbca-update-backupservercert.yaml ファイルを作成するには、コマンド `kubectl create -f nbca-update-backupservercert.yaml` を実行します。

3 backupservercert オブジェクトが作成されたら、カスタムリソースの状態を確認します。

ECA 証明書操作の実行

外部認証局 (ECA) の作成、更新、削除の各操作を実行する前に、ECA モードでバックアップサーバーを構成する必要があります。

ECA モードがオンかどうかを確認するには、コマンド
`/usr/opensv/netbackup/bin/nbcertcmd -getSecConfig -caUsage` を実行します。

出力は次のようになります。

```
NBCA: ON
```

```
ECA: ON
```

ECA モードでバックアップサーバーを構成するには、『NetBackup™ セキュリティおよび暗号化ガイド』の「NetBackup での外部 CA のサポートについて」を参照してください。

ECA 証明書の指定は次のようになります。

```
apiVersion: netbackup.veritas.com/v1
kind: BackupServerCert
metadata:
  name: backupservercert-sample-eca
  namespace: kops-ns
spec:
  clusterName: cluster.sample.com:port
  backupServer: primaryserver.sample.domain.com
  certificateOperation: Create | Update | Remove
  certificateType: ECA
  ecaAttributes:
    ecaCreateOptions:
      ecaSecretName: "Secret name consists of cert, key, passphrase,
cacert"
      copyCertsFromSecret: true | false
      isKeyEncrypted: true | false
    ecaUpdateOptions:
      ecaCrlCheck: DISABLE | LEAF | CHAIN
      ecaCrlRefreshHours: range[0,4380]
```

表 3-2 ECA 証明書操作

操作形式	オプションとコメント
作成 (Create)	<ul style="list-style-type: none"> ■ secretName: 証明書、キー、パスフレーズ、cacert を含む Secret の名前。 ■ copyCertsFromSecret: 指定可能な値は true および false です。このオプションは、外部 CA がすべてのプライマリサーバーで共通しているため、追加されます。すべてのプライマリサーバーの Kubernetes Operator に同じ証明書を登録できます。したがって、証明書とキーを毎回コピーする必要はありません。証明書とキーのコピーは、このオプションを使用して制御できます。 証明書とキーの問題が原因で ECAHealthCheck が失敗した場合は、証明書を再度コピーする必要があります。 ■ isKeyEncrypted: 秘密鍵が暗号化されている場合はこのフィールドを true に設定し、それ以外の場合は false に設定します。
削除 (Remove)	なし
更新 (Update)	<ul style="list-style-type: none"> ■ ecaCrlCheck: 外部証明書の失効の確認レベルを指定できません。指定可能な値は LEAF、CHAIN、DISABLE です。 ■ ecaCrlRefreshHours: 証明書失効リストをダウンロードする間隔 (時間単位) を指定します。指定可能な値の範囲は 0 から 4380 までです。

ECA が署名した証明書の作成

NetBackup は、Kubernetes Operator に登録された ECA の複数のプライマリサーバーでの使用をサポートしています。外部 CA がプライマリサーバーで共通している場合、通信中に証明書失効リストを動的にフェッチするには、証明書失効リスト配布ポイントを使用する必要があります。

ECA が署名した証明書を作成するには

- 1 証明書失効リスト配布ポイントを使用して、証明書失効リストをフェッチします。
- 2 ECA が署名した証明書チェーン、秘密鍵、(必要な場合は) パスフレーズをホームディレクトリに準備しておきます。
- 3 手順 2 で説明した各ファイルでサポートされているさまざまな形式 (DER、PEM など) を識別します。詳しくは、『NetBackup™ セキュリティおよび暗号化ガイド』の「外部 CA が署名した証明書の構成オプション」セクションを参照してください。
- 4 手順 3 で説明したファイルを使用して Secret を作成します。
 - 秘密鍵が暗号化されていない場合に Secret を作成するには、コマンド `kubectl create secret generic <Name of secret>` を実行します。

```
--from-file=cert_chain=<File path to ECA signed certificate
chain> --from-file=key=<File path to private key>
--from-file=cacert=<File path to External CA certificate> -n
<Namespace where kops is deployed>
```

- 秘密鍵が暗号化されている場合に **Secret** を作成するには、コマンド `kubectl create secret generic <Name of secret>` を実行します。

```
--from-file=cert_chain=<File path to ECA signed certificate
chain> --from-file=key=<File path to private key>
--from-file=cacert=<File path to External CA certificate>
--from-file=passphrase=<File path to passphrase
of encrypted private key> -n <Namespace where kops is deployed>
```

ディレクトリ構造は次のようになります。

```
├─ cert_chain.pem
├─ private
│  └─ key.pem
│  └─ passphrase.txt
└─ trusted
    └─ cacerts.pem
```

`cert_chain.pem` は ECA が署名した証明書チェーンです。

`private/key.pem` は秘密鍵です。

`private/passphrase.txt` は秘密鍵のパスフレーズです。

`trusted/cacerts.pem` は外部 CA 証明書です。

- 秘密鍵が暗号化されていない場合に名前 `eca-secret` の **Secret** を作成するには、次のコマンドを実行します。

```
kubectl create secret generic
eca-secret--from-file=cert_chain=cert_chain.pem
--from-file=key=private/key.pem
--from-file=cacert=trusted/cacerts.pem -n kops-ns
```

- 秘密鍵が暗号化されている場合に名前 `eca-secret` の **Secret** を作成するには、次のコマンドを実行します。

```
kubectl create secret generic eca-secret
--from-file=cert_chain=cert_chain.pem
--from-file=key=private/key.pem
--from-file=cacert=trusted/cacerts.pem
--from-file=passphrase=private/passphrase.txt
-n kops-ns
```

- 5 Secret が作成されたら、backupservercert オブジェクトのカスタムリソースを作成します。

eca-create-backupservercert.yaml ファイルは次のようになります。

```
apiVersion: netbackup.veritas.com/v1
kind: BackupServerCert
metadata:
  name: backupservercert-eca-create
  namespace: kops-ns
spec:
  clusterName: cluster.sample.com:port
  backupServer: backupserver.sample.domain.com
  certificateOperation: Create
  certificateType: ECA
  ecaAttributes:
    ecaCreateOptions:
      ecaSecretName: eca-secret
      copyCertsFromSecret: true
      isKeyEncrypted: false
```

- eca-create-backupservercert.yaml ファイルのテキストをコピーします。
 - テキストエディタを開き、yaml ファイルのテキストを貼り付けます。
 - その後、そのテキストに yaml ファイル拡張子を付けて、Kubernetes クラスタにアクセスできるホームディレクトリに保存します。
- 6 証明書とキーを Kubernetes Operator にコピーするには、次の操作のいずれかを実行します。
- copyCertsFromSecret を true に設定します。
 - Kubernetes Operator に存在する証明書とキーのコピーを回避するには、copyCertsFromSecret を false に設定します。

メモ: ECA はすべてのプライマリサーバーで共通しているため、Kubernetes Operator では、必要に応じてすべてのプライマリサーバーに登録できる 1 組の証明書とキーが必要です。以前にコピーした証明書とキーに問題がないかぎり、証明書とキーを毎回コピーする必要はありません。

メモ: 証明書やキーに関連した理由 (破損、期限切れ、または ECA の変更) が原因で ecaHealthCheck が失敗した場合は、エラーの原因を特定し、フラグを使用して有効な証明書のコピーを実行します。

- 7 秘密鍵が暗号化されている場合は `isKeyEncrypted` フラグを `true` に設定し、暗号化されていない場合は `false` に設定します。秘密鍵が暗号化されている場合は、パスフレーズが `Secret` で指定されていることを確認します。
- 8 手順 5 で `backupservercert.yaml` を作成した `Secret` 名を使用して `ecaSecretName` を設定します。
- 9 `eca-create-backupservercert.yaml` ファイルを作成するには、コマンド `kubectl create -f eca-create-backupservercert.yaml` を実行します。
- 10 `backupservercert` カスタムリソースが作成されたら、カスタムリソースの状態を確認します。
- 11 NetBackup Web UI で外部証明書の詳細を表示するには、『NetBackup™ Web UI 管理者ガイド』の「ドメイン内の NetBackup ホストの外部証明書情報の表示」セクションを参照してください。

ECA が署名した証明書の削除

ECA が署名した証明書をプライマリサーバーから削除できます。

ECA が署名した証明書を削除するには

- 1 操作を削除、証明書の種類を `ECA` に設定して `backupservercert` を作成します。

`eca-remove-backupservercert.yaml` ファイルは次のようになります。

```
apiVersion: netbackup.veritas.com/v1
kind: BackupServerCert
metadata:
  name: backupservercert-eca-remove
  namespace: kops-ns
spec:
  clusterName: cluster.sample.com:port
  backupServer: backupserver.sample.domain.com
  certificateOperation: Remove
  certificateType: ECA
```

- `eca-remove-backupservercert.yaml` ファイルのテキストをコピーします。
 - テキストエディタを開き、`yaml` ファイルのテキストを貼り付けます。
 - その後、そのテキストに `yaml` ファイル拡張子を付けて、`Kubernetes` クラスタにアクセスできるホームディレクトリに保存します。
- 2 `eca-remove-backupservercert.yaml` ファイルを作成するには、コマンド `kubectl create -f eca-remove-backupservercert.yaml` を実行します。
 - 3 オブジェクトが作成されたら、カスタムリソースの状態を確認する必要があります。失敗した場合は、必要な措置を講じることができます。

上記の手順を実行すると、指定したプライマリサーバーに関する外部証明書の詳細がローカル証明書ストアから削除されます。証明書は、システムからも NetBackup データベースからも削除されません。

ECA を無効にする場合は、『NetBackup™ セキュリティおよび暗号化ガイド』の「NetBackup ドメインでの外部 CA の無効化」セクションを参照してください。

バックアップサーバーの Kubernetes Operator に ECA を登録したものの、その後 NBCA のみをサポートするバックアップサーバーを再インストールした場合は、Kubernetes Operator から ECA の登録を削除する必要があります。これは、`nbcertcmd` の実行時に、バックアップサーバーの CA のサポートとの通信が比較されることがあり、不一致の場合にエラーが発生するためです。

ECA が署名した証明書の更新

ECA で設定可能な特定のオプションがあります。更新操作でこれらのオプションを設定できます。

ECA が署名した証明書を更新するには

- 1 操作形式を更新に設定して `backupservercert` オブジェクトを作成します。

`eca-update-backupservercert.yaml` ファイルは次のようになります。

```
apiVersion: netbackup.veritas.com/v1
kind: BackupServerCert
metadata:
  name: backupservercert-eca-update
  namespace: kops-ns
spec:
  clusterName: cluster.sample.com:port
  backupServer: backupserver.sample.domain.com
  certificateOperation: Update
  certificateType: ECA
  ecaAttributes:
    ecaUpdateOptions:
      ecaCrlCheck: DISABLE | LEAF | CHAIN
      ecaCrlRefreshHours: [0,4380]
```

- `eca-update-backupservercert.yaml` ファイルのテキストをコピーします。
- テキストエディタを開き、`yaml` ファイルのテキストを貼り付けます。
- その後、そのテキストに `yaml` ファイル拡張子を付けて、Kubernetes クラスタにアクセスできるホームディレクトリに保存します。

- 2 `eca-update-backupservercert.yaml` ファイルを作成するには、コマンド `kubectl create -f eca-update-backupservercert.yaml` を実行します。

- 3 ECA_CRL_CHECK オプションを使用すると、ホストの外部証明書の失効の確認レベルを指定できます。外部証明書の失効の確認を無効にすることもできます。確認に基づいて、ホストとの通信時に、証明書失効リスト (CRL) に対して証明書の失効状態が検証されます。詳しくは、『NetBackup™ セキュリティおよび暗号化ガイド』の「NetBackup サーバーとクライアントの ECA_CRL_CHECK」セクションを参照してください。
- 4 ECA_CRL_REFRESH_HOURS オプションは、ピアホスト証明書の証明書失効リスト配布ポイント (CDP) で指定した URL から CRL をダウンロードする間隔 (時間単位) を指定します。詳しくは、『NetBackup™ セキュリティおよび暗号化ガイド』の「NetBackup サーバーとクライアントの ECA_CRL_REFRESH_HOURS」セクションを参照してください。

証明書の種類の識別

NetBackup は、Kubernetes Operator に登録されている証明書の種類を識別するのに役立ちます。

証明書の種類を識別するには

- 1 Kubernetes Operator ポッドを一覧表示するには、コマンド `kubectl get pods -n <namespace of Kubernetes operator>` を実行します。
- 2 管理者権限を使用して Kubernetes Operator にログオンし、次のコマンドを実行します。

```
kubectl exec pod/nbu-controller-manager-7c99fb8474-hzrsl -n  
<namespace of Kubernetes operator> -c netbackupkops -it -- bash
```

- 3** Kubernetes に NBCA 証明書を使用しているバックアップサーバーを一覧表示するには、次のコマンドを実行します。

```
/nbcertcmdtool/nbcertcmdtool -atLibPath/nbcertcmdtool/  
-standalone -installDir "/usr/opencv" -listCertDetails -NBCA
```

出力は次のようになります。

```
Master Server : masterserver.sample.domain.com  
Host ID : b06738f0-a8c1-47bf-8d95-3b9a41b7bb0a  
Issued By : /CN=broker/OU=NBCANBKOps  
Serial Number : 0x508cdf4500000008  
Expiry Date : Dec 22 05:46:32 2022 GMT  
SHA-1 Fingerprint : 4D:7A:D9:B9:61:4E:93:29:B8:93:0B:E0:  
07:0A:28:16:46:F6:39:C6  
SHA-256 Fingerprint : C2:FA:AC:B5:21:6B:63:49:30:AC:4D:5E:  
61:09:9A:8C:C6:40:4A:44:B6:39:7E:2B:B3:36:DE:D8:F5:D1:3D:EF  
Key Strength : 2048  
Subject Key Identifier : AC:C4:EF:40:7D:8D:45:B4:F1:89:DA:FB:  
E7:FD:0F:FD:EC:61:12:C6  
Authority Key Identifier : 01:08:CA:40:15:81:75:7B:37:9F:51:78:  
  
B2:6A:89:A1:44:2D:82:2B
```

- 4 **Kubernetes** に ECA 証明書を使用しているバックアップサーバーを一覧表示するには、次のコマンドを実行します。

```
/nbcertcmdtool/nbcertcmdtool -atLibPath/nbcertcmdtool/  
-standalone -installDir"/usr/opensv" -listCertDetails -ECA
```

出力は次のようになります。

```
Subject Name : CN=ECA-KOPS,O=Veritas,OU=ECANBKOps  
Issued By : CN=ICA-2,O=Veritas,OU=ECANBKOps  
Serial Number : 0x56cf16040258d3654339b7f39817de89240d58  
Expiry Date : Dec 16 05:48:16 2022 GMT  
SHA-1 Fingerprint : 70:DE:46:72:57:56:4E:47:DB:82:8B:8D:A3:  
4B:BB:F9:8D:2C:B7:8E  
SHA-256 Fingerprint : E0:69:5F:79:A6:60:DB:7B:69:76:D3:A8:  
E6:E1:F2:0D:8C:6C:E6:4E:C4:5D:A4:77:17:5A:C2:42:89:74:15:7D  
Key Strength : 2048  
Subject Key Identifier : F0:E7:1F:8C:50:FD:4D:25:40:69:77:6C:  
2A:35:72:B6:1D:8E:E5:17  
Authority Key Identifier : D7:53:57:C7:A6:72:E3:CB:73:BD:48:51:  
  
2F:CB:98:A3:0B:8B:BA:5C  
Master Server : masterserver.sample.domain.com  
Host ID : b85ba9bf-02a8-439e-b787-ed52589c37d1
```

Kubernetes 資産の管理

この章では以下の項目について説明しています。

- [Kubernetes クラスタの追加](#)
- [設定を行う](#)
- [資産への保護の追加](#)

Kubernetes クラスタの追加

NetBackup に Kubernetes クラスタを追加する前に、クラスタに Kubernetes Operator をインストールして構成する必要があります。そうしないと、クラスタの検証が失敗し、さらにクラスタの追加操作が失敗します。

Kubernetes Operator を構成すると、NetBackup に Kubernetes クラスタを追加し、クラスタ内のすべての資産を自動的に検出できます。

クラスタを追加するには

- 1 左側の[作業負荷 (Workloads)]で、[Kubernetes]をクリックします。
- 2 [Kubernetes クラスタ (Kubernetes clusters)]タブをクリックし、[追加 (Add)]をクリックします。
- 3 [Kubernetes クラスタの追加 (Add Kubernetes cluster)]ページで、次を入力します。
 - [クラスタ名 (Cluster name)]: クラスタの名前を入力します。この名前は DNS の解決可能な値または IP アドレスである必要があります。例: cluster.sample.domain.com。
 - [ポート (Port)]: Kubernetes API サーバーのポート番号を入力します。
 - [コントローラの名前空間 (Controller namespace)]: Kubernetes クラスタ内で NetBackup Kubernetes Operator が配備されている名前空間を入力します。例: kops-ns。

4 [次へ (Next)]をクリックします。[クレデンシャルの管理 (Manage credentials)]ページで、クラスタにクレデンシャルを追加できます。

- 既存のクレデンシャルを使用するには、[既存のクレデンシャルから選択してください (Select from existing credentials)]を選択し、[次へ (Next)]をクリックします。次のページで、必要なクレデンシャルを選択し、[次へ (Next)]をクリックします。
- 新しいクレデンシャルを作成するには、[クレデンシャルの追加 (Add credential)]をクリックし、[次へ (Next)]をクリックします。[クレデンシャルの管理 (Manage credentials)]ページで、次を入力します。
 - [クレデンシャル名 (Credential name)]: クレデンシャルの名前を入力します。
 - [タグ (Tag)]: クレデンシャルに関連付けるタグを入力します。
 - [説明 (Description)]: クレデンシャルの説明を入力します。
 - NetBackup に Kubernetes クラスタを追加するには、CA 証明書とトークンが必要です。CA 証明書とトークンを取得するには、Kubernetes クラスタでコマンド `kubectl get secret <[namespace-name]-backup-server-token-<id>> -n <namespace name> -o yaml` を実行します。
 - [トークン (Token)]: 認証トークンの値を Base64 エンコード形式で入力します。
 - [CA 証明書 (CA certificate)]: CA 証明書ファイルの内容を指定します。

5 [次へ (Next)]をクリックします。

クレデンシャルが検証され、検証に成功すると、クラスタが追加されます。クラスタが追加されると、自動検出が実行され、クラスタ内の利用可能な資産が検出されます。

メモ: NetBackup Kubernetes バージョン 10.1 で、クラスタの編集操作が失敗し、エラーメッセージが表示されます。この問題を解決するには、最初にクラスタを削除し、クラスタを再び追加することをお勧めします。

設定を行う

Kubernetes の設定では、Kubernetes の配備のさまざまな側面を構成できます。

Kubernetes のリソース制限の設定

この設定によって、Kubernetes クラスタで同時に実行できるバックアップの数を制御できます。スナップショットジョブを実行する場合のデフォルト値は 1、スナップショットからのバックアップジョブを実行する場合のデフォルト値は 4 とそれぞれ異なります。

たとえば、20 の資産を保護し、制限を 5 に設定している場合に、スナップショットのみのバックアップジョブを実行すると、5 つの資産のみ同時にバックアップを実行でき、残りの 15 の資産はキューに入ります。最初の 5 つの資産のうち 1 つのバックアップが完了すると、キューの資産にバックアップの順番が回ります。

たとえば、スナップショットジョブを実行する際のリソース制限のデフォルト値は 1 です。これは、クラスタごとに 1 つのバックアップジョブのみが進行中になり、残りの資産はキューに投入された状態になることを示します。

この設定は、システムとネットワークリソースの使用を最適化するために推奨されます。この設定は、選択しているプライマリサーバーのすべての Kubernetes バックアップに適用されます。

リソース制限を設定するには

- 1 左側で[作業負荷 (Workloads)]、[Kubernetes]の順にクリックします。
- 2 右上で[Kubernetes 設定 (Kubernetes settings)]、[リソース制限 (Resource limits)]の順にクリックします。
- 3 リソース制限を設定するには、次のいずれかを実行します。
 - [Kubernetes クラスタあたりのバックアップジョブ (Backup jobs per Kubernetes cluster)]の横にある[編集 (Edit)]をクリックします。デフォルトでは、制限は 1 です。
デフォルトでは、クラスタあたりのバックアップジョブのリソース制限は 1 です。
 - [Kubernetes クラスタあたりのスナップショットからのバックアップジョブ (Backup from Snapshot Jobs per Kubernetes Cluster)]の横にある[編集 (Edit)]をクリックします。
デフォルトでは、クラスタあたりのスナップショットからのバックアップジョブのリソース制限は 4 です。
- 4 [Kubernetes クラスタの編集 (Edit Kubernetes cluster)]ダイアログで、次の操作を行います。
 - [グローバル (Global)]フィールドに値を入力し、すべてのクラスタのグローバル制限を設定します。この制限は、クラスタで同時に実行されるバックアップジョブとスナップショットからのバックアップジョブの数を示します。
 - そのクラスタのグローバル制限を上書きする個別の制限をクラスタに追加できます。クラスタに個々の制限を設定するには、[追加 (Add)]をクリックします。
 - クラスタ名を手動で入力した後に、制限の値を入力する必要があります。配備されている利用可能な各クラスタに制限を追加できます。
 - [保存 (Save)]をクリックして、変更を保存します。

メモ: NetBackup 10.0 リリースでは、datamover ポッドは Kubernetes のリソース制限の設定を超過します。

詳しくは、p.76 の「[datamover ポッドが Kubernetes のリソース制限を超過](#)」を参照してください。

自動検出の間隔の構成

自動検出により、クラスタ内で NetBackup によって保護される資産数が記録されます。この設定を使用すると、NetBackup が自動検出を実行して、クラスタ内の新しい資産を特定し、クラスタから排除または削除された資産の数を収集する間隔を設定できます。

指定できる値は、5 分から 1 年の間です。デフォルト値は 30 分です。

自動検出の間隔を設定するには

- 1 左側で[作業負荷 (Workloads)]、[Kubernetes]の順にクリックします。
- 2 右上で[Kubernetes 設定 (Kubernetes settings)]、[自動検出 (Autodiscovery)]の順にクリックします。
- 3 [間隔 (Frequency)]の近くにある[編集 (Edit)]をクリックします。
- 4 NetBackup が自動検出を実行した後の時間数を入力します。[保存 (Save)]をクリックします。

完全検出と増分検出の実行

Kubernetes クラスタが追加されると、自動検出サイクルがトリガされ、Kubernetes クラスタで利用可能なすべての資産が検出されます。その日最初の自動検出は完全検出で、以降の自動検出は増分検出です。

検出を実行するには

- 1 左側で[作業負荷 (Workloads)]、[Kubernetes]の順にクリックします。
- 2 [Kubernetes クラスタ (Kubernetes clusters)]リストで、クラスタの行の[処理 (Actions)]メニュー (縦になった省略記号) をクリックし、[今すぐ検出 (Discovery now)]をクリックします。

この場合、増分検出では前回の検出実行以降にクラスタで変更された NetBackup 資産のみをフェッチします。したがって、最初の検出は完全検出で、それ以降のすべての検出は増分検出になります。

権限の構成

管理権限を使用して、ユーザーロールに異なるアクセス権を割り当てることができます。詳しくは、『NetBackup Web UI 管理者ガイド』の「役割ベースのアクセス制御の管理」の章を参照してください。

資産への保護の追加

[名前空間 (Namespaces)] タブ ([作業負荷 (Workloads)]、[Kubernetes]) を使用して、Kubernetes クラスタ内の資産の監視、保護状態の確認、保護されていない資産への保護の追加を簡単に行えます。また、[今すぐバックアップ (Backup now)] 機能を使用して資産のクイックバックアップを作成できます。この機能は、スケジュール設定されたバックアップに影響を与えることなく、選択した資産のワンタイムバックアップを作成します。

[名前空間 (Namespaces)] タブに、NetBackup によって保護できる検出済みおよびインポート済みの Kubernetes 資産がすべて表示されます。このタブには、次の情報が表示されます。

- [名前空間 (Namespaces)]: 資産の表示名。
- [クラスタ (Cluster)]: 資産が属するクラスタ。
- [保護計画名 (Protected by)]: 資産に適用された保護計画の名前。
- [最後に成功したバックアップ (Last successful backup)]: 資産のバックアップが最後に成功した日時。

[名前空間 (Namespaces)] タブで次の操作を実行できます。

保護されていない資産に保護を追加するには

- 1 左側で[作業負荷 (Workloads)]、[Kubernetes]の順にクリックします。
- 2 資産の行でオプションを選択します。右上の[保護の追加 (Add protection)]をクリックします。または、資産の行の[処理 (Actions)]メニューをクリックして、[保護の追加 (Add protection)]をクリックします。
- 3 リストから保護計画を選択し、[次へ (Next)]をクリックします。次のページで、[保護 (Protect)]をクリックします。

資産をすばやくバックアップするには

- 1 資産の行でオプションを選択し、右上の[今すぐバックアップ (Backup now)]をクリックします。または、資産の行の[処理 (Actions)]メニューをクリックして、[今すぐバックアップ (Backup now)]をクリックします。
- 2 次のページで、
 - すでに保護されている資産をバックアップする場合は、資産がすでにサブスクライブされている計画のリストから保護計画を選択し、[バックアップの開始 (Start backup)]をクリックします。
 - 保護されていない資産をバックアップする場合は、その資産で利用可能な計画から保護計画を選択し、[バックアップの開始 (Start backup)]をクリックします。

Kubernetes インテリジェントグループの管理

この章では以下の項目について説明しています。

- [インテリジェントグループについて](#)
- [インテリジェントグループの作成](#)
- [インテリジェントグループの削除](#)
- [インテリジェントグループの編集](#)

インテリジェントグループについて

問い合わせと呼ばれるフィルタのセットに基づいて、インテリジェント資産グループを定義して、資産のダイナミックグループを作成および保護できます。**NetBackup** は、問い合わせに基づいて **Kubernetes** 名前空間を選択し、それらをグループに追加します。インテリジェントグループでは、資産の環境内の変更が自動的に反映されるため、環境内で資産を追加または削除しても、グループ内の資産のリストを手動で修正する必要がないことに注意してください。

インテリジェントグループに保護計画を適用すると、問い合わせ条件を満たすすべての資産が自動的に保護されます。

メモ: インテリジェントグループの作成、更新、削除は、管理が必要な資産に対する必要な **RBAC** 権限が役割に付与されている場合にのみ実行できます。**NetBackup** のセキュリティ管理者は、資産タイプ (クラスタ、名前空間、VMGroup) に対するアクセス権を付与できます。『**NetBackup Web UI 管理者ガイド**』を参照してください。

インテリジェントグループの作成

インテリジェントグループを作成するには

- 1 左側の[作業負荷 (Workloads)]で、[Kubernetes]をクリックします。
- 2 [インテリジェントグループ (Intelligent groups)]タブ、[+ 追加 (+ Add)]の順にクリックします。
- 3 グループの名前と説明を入力します。
- 4 [クラスタ (Cluster)]セクションで、[+ クラスタの追加 (+Add clusters)]をクリックします。
- 5 [クラスタの追加 (Add clusters)]ウィンドウで、一覧から 1 つ以上のクラスタを選択し、[選択 (Select)]をクリックします。選択したクラスタがインテリジェントグループに追加されます。

メモ: インテリジェントグループは、複数のクラスタをまたいで作成できます。グループにクラスタを追加するために必要な権限を持っていることを確認します。グループを表示して管理するには、選択したクラスタとグループに対する表示と管理の権限がグループ管理者に付与されている必要があります。

- 6 [資産の選択 (Select assets)]セクションで、次のいずれかを実行します。
 - [すべての資産を含める (Include all assets)]を選択します。
このオプションでは、デフォルトの問い合わせを使用して、保護計画の実行時にすべての資産をバックアップ対象として選択します。
 - 特定の条件を満たす資産のみを選択するには、独自の問い合わせを作成するために[条件の追加 (Add condition)]をクリックします。
 - 資産のラベル条件を追加するには、[ラベルの条件の追加 (Add label condition)]をクリックして追加します。

- 7 条件を追加するには、ドロップダウンを使用してキーワードと演算子を選択し、値を入力します。

クエリーの効果を変更するには、[+ 条件 (+ Condition)]をクリックし、[AND]または[OR]をクリックして、キーワード、演算子、条件の値を選択します。

メモ: ラベル条件を追加するには、[ラベル条件の追加 (Add label condition)]をクリックしてラベルキーと値を入力します。

メモ: 条件にラベル値を含めず、ラベルキーのみを含めることもできます。値は、ラベル条件に追加するオプションのパラメータであるためです。

メモ: サブクエリーを追加するには、[サブクエリーの追加 (Add sub-query)]をクリックします。複数のレベルのサブクエリーを追加できます。

- 8 問い合わせをテストするには、[プレビュー (Preview)]をクリックします。

問い合わせベースの選択処理は動的です。Kubernetes クラスタの変更は、保護計画の実行時に問い合わせが選択する資産に影響する可能性があります。その結果、保護計画が後で実行された時に問い合わせが選択する資産が、プレビューに現在表示されているものと同一でなくなる可能性があります。

メモ: [インテリジェントグループ (Intelligent groups)]で問い合わせを使用する場合、問い合わせ条件に英語以外の文字が含まれていると、NetBackup Web UI に、問い合わせに一致する正確な資産のリストが表示されないことがあります。

任意の属性に `not equals` フィルタ条件を使用すると、属性に値が存在しない (`null`) 資産を含む資産が戻されます。

メモ: [プレビュー (Preview)]をクリックするかグループを保存した場合、グループの資産を選択するときに、問い合わせオプションでは大文字と小文字が区別されます。

- 9 グループを保護計画に追加せずに保存するには、[追加 (Add)]をクリックします。
- 10 グループを保護計画に追加して保存するには、[追加と保護 (Add and protect)]をクリックします。
- 11 保護計画にグループをサブスクライブするには、[保護の追加 (Add protection)]をクリックします。

グループを選択して保護計画を適用し、[保護する (Protect)]をクリックします。

選択した資産グループが保護計画に正常にサブスクライブされます。

資産にラベル条件を追加する際の制限事項

次の考慮事項と制限事項が適用されます。

- インテリジェントグループ作成の問い合わせビルダーでは、最初のラベル条件に[ラベルキー]と[値]を定義する必要があります。
- 後続の条件では、[ラベルキー]の条件または[ラベルキーと値]の条件のいずれかを定義できます。
- 条件とラベルの組み合わせがある場合は、最初に名前空間条件を定義してから、ラベル条件を定義する必要があります。

メモ: 条件については、名前空間の値のみが許可されます。

インテリジェントグループの削除

インテリジェントグループを削除するには

- 1 左側の[作業負荷 (Workloads)]で、[Kubernetes]をクリックします。
- 2 [インテリジェントグループ (Intelligent groups)]タブでグループを見つけます。
- 3 グループが保護されていない場合は、グループを選択して[削除 (Delete)]をクリックします。
- 4 グループが保護されている場合は、グループを選択し、[保護の削除 (Remove protection)]をクリックしてすべての保護計画を削除します。
- 5 次に、[インテリジェントグループ (Intelligent groups)]タブでこのグループを選択し、[削除 (Delete)]をクリックします。

インテリジェントグループの編集

インテリジェントグループの名前と説明の詳細を編集できます。スケジュールバックアップの時間帯や他のオプションなど、保護計画の特定の設定を編集できます。

インテリジェントグループを編集するには

- 1 左側の[作業負荷 (Workloads)]で、[Kubernetes]をクリックします。
- 2 [インテリジェントグループ (Intelligent groups)]タブで、保護を編集するグループをクリックします。
- 3 次のいずれかを実行します。
 - [名前と説明を編集する (Edit name and description)]をクリックして、選択したグループの名前と説明を編集した後、[保存 (Save)]をクリックします。

- [資産 (Assets)] タブで、[編集 (Edit)] をクリックしてクラスタを追加または削除します。選択した資産の問い合わせ条件を更新し、[保存 (Save)] をクリックします。
グループのクラスタリストを編集したり、グループのクラスタを追加または削除したりできます。選択した資産グループの問い合わせ条件を変更することもできます。
- [権限 (permissions)] タブで、[追加 (Add)] をクリックして利用可能な役割の権限を更新し、[保存 (Save)] をクリックします。

Kubernetes 資産の保護

この章では以下の項目について説明しています。

- [インテリジェントグループの保護](#)
- [インテリジェントグループからの保護の削除](#)
- [バックアップスケジュールの構成](#)
- [バックアップオプションの構成](#)
- [バックアップの構成](#)
- [自動イメージレプリケーション \(AIR\) と複製の構成](#)
- [ストレージユニットの構成](#)

インテリジェントグループの保護

Kubernetes 作業負荷用に Kubernetes 固有の保護計画を作成できます。その後、保護計画にインテリジェントグループをサブスクライブできます。

次の手順を使用して、インテリジェントグループを保護計画にサブスクライブします。

メモ: 自分に割り当てられている RBAC の役割によって、管理するインテリジェントグループと、使用する保護計画にアクセスできるようにする必要があります。

インテリジェントグループを保護するには

- 1 左側で[Kubernetes]をクリックします。
- 2 [インテリジェントグループ (Intelligent groups)]タブで、グループにチェックマークを付けて[保護の追加 (Add protection)]をクリックします。

- 3 保護計画を選択し、[次へ (Next)]をクリックします。
- 4 グループを選択し、[保護する (Protect)]をクリックして保護計画にサブスクライブします。

即時保護のための [今すぐバックアップ (Backup now)] オプション

スケジュール設定された保護計画とは別に、[今すぐバックアップ (Backup now)] オプションを使用してグループをすぐにバックアップし、計画外の状況に対して保護することもできます。

インテリジェントグループからの保護の削除

インテリジェントグループのサブスクライブを、保護計画から解除できます。インテリジェントグループのサブスクライブが保護計画から解除されると、それ以降バックアップは実行されません。

インテリジェントグループから保護を削除するには

- 1 左側の [作業負荷 (Workloads)] で、[Kubernetes] をクリックします。
- 2 [インテリジェントグループ (Intelligent groups)] タブで、保護を削除するグループをクリックします。
- 3 [保護の削除 (Remove protection)]、[はい (Yes)] の順にクリックします。

バックアップスケジュールの構成

Kubernetes 作業負荷の保護計画を作成する際、[バックアップスケジュールの追加 (Add backup schedule)] ダイアログの [属性 (Attributes)] タブでバックアップスケジュールを追加できます。

保護計画の作成方法について詳しくは、『NetBackup Web UI 管理者ガイド』の「保護計画の管理」セクションを参照してください。

Kubernetes バックアップジョブのバックアップスケジュールを追加するには

- 1 左側で [保護 (Protection)]、[保護計画 (Protection plans)]、[追加 (Add)] の順にクリックします。
- 2 [基本プロパティ (Basic properties)] で、[名前 (Name)] と [説明 (Description)] を入力し、[作業負荷 (Workload)] ドロップダウンリストから [Kubernetes] を選択します。

- 3 [次へ (Next)]をクリックします。[スケジュール (Schedules)]で、[スケジュールの追加 (Add schedule)]をクリックします。

[バックアップスケジュールの追加 (Add backup schedule)]タブで、バックアップとスナップショットを保持するためのオプションを構成できます。
- 4 [反復 (Recurrence)]ドロップダウンから、バックアップの頻度を指定します。
- 5 [スナップショットとバックアップコピー (Snapshot and backup copy)]オプションで、以下のいずれかを行います。

- 保護計画のスナップショットからのバックアップを構成するには、[スナップショットからバックアップを作成 (Create backup from snapshot)]オプションを選択します。[バックアップの保持期間 (Keep backup for)]ドロップダウンを使用して、スナップショットからのバックアップの保持期間を指定します。

メモ: Kubernetes 作業負荷でサポートされるのは、完全バックアップのスケジュールのみです。バックアップ期間は、時間、日、週、月、年単位で設定できます。

デフォルトでは、4 週間がバックアップの保持期間です。

メモ: バックアップコピーのレプリケーションと複製のオプションを有効にするには、[スナップショットからバックアップを作成 (Create backup from snapshot)]オプションを選択する必要があります。

- [スナップショットからバックアップを作成 (Create backup from snapshot)]オプションを選択しなかった場合、デフォルトでは、バックアップジョブを実行するために[スナップショットのみのストレージ (Snapshot only storage)]バックアップが構成されます。
 - バックアップのレプリカコピーを作成するには、[スナップショットからバックアップのレプリカコピー (自動イメージレプリケーション)を作成 (Create a replica copy (Auto Image Replication) of the backup from snapshot)]オプションを選択します。
 - バックアップの複製コピーを作成するには、[スナップショットからバックアップの複製コピーを作成 (Create a duplicate copy of the backup from snapshot)]オプションを選択します。
- 6 『NetBackup Web UI 管理者ガイド』の「保護計画の管理」セクションにある説明に従って、[開始時間帯 (Start window)]タブでスケジュールの作成を続行します。
 - 7 『NetBackup Web UI 管理者ガイド』の「保護計画の管理」セクションにある説明に従って、スナップショットからのバックアップ用に[ストレージオプション (Storage options)]の設定を続行します。

バックアップオプションの構成

保護計画のバックアップオプションを構成できます。

保護計画の作成方法について詳しくは、『NetBackup Web UI 管理者ガイド』の「保護計画の管理」セクションを参照してください。

保護計画の構成時にバックアップオプションを構成するには

- 1 [バックアップオプション (Backup options)] ページの [リソースの種類の選択 (Resource kind selection)] セクションで、次を実行します。
 - デフォルトでは [すべてのリソースの種類をバックアップに含めます。 (Include all resource kinds in the backup)] オプションが選択されており、バックアップジョブのすべてのリソースの種類が含まれています。
 - [次のリソースの種類をバックアップから除外します。 (Exclude the following resource kinds from the backup)] オプションを選択すると、リソースの種類がバックアップジョブから除外されます。 [選択 (Select)] をクリックして、静的リストからリソースの種類を選択します。選択したリソースの種類がテキストフィールドに表示されるか、カスタムリソース定義 (CRD) を正しい形式 (type.group) で手動で入力できます。選択したリソースの種類を除外リストから削除できます。カスタムリソースの種類の定義が静的リストにない場合は、カスタムリソース定義 (CRD) を手動で入力できます。たとえば、demo.nbu.com のように入力します。

メモ: リソースの種類の除外リストは、リソースをマッピングするという点で、バックアップ用に選択したラベルより優先されます。

- 2 [ラベルの選択 (Label selection)] セクションで [追加 (Add)] をクリックして、バックアップ用に関連付けられたリソースをマッピングするラベルを追加し、ラベルの接頭辞とキーを入力し、演算子を選択します。含まれているラベルに関連付けられているすべてのリソースが、バックアップジョブに対してマッピングされます。

ラベルに追加できる 4 つの演算子を次に示します。

- 値と等しいラベルキーを入力します。
- すでに存在するラベルキーを、値なしで入力します。
- 一連の値に含まれているラベルキーを入力します。
- 一連の値に含まれていないラベルキーを入力します。

演算子の一連の値に含まれている、または含まれていない複数の値をカンマ区切りで追加できます。

メモ: 条件が正常に適用されるようにするには、選択したラベルがバックアップ時に存在する必要があります。

メモ: ラベルの選択では、複数のラベル条件間で矛盾しないリソースの種類の選択のみを除外する必要があります。

[確認 (Review)] ページには、リソースの種類の除外リストと、リストに含めるために選択したラベル、および選択したストレージユニットが表示されます。

メモ: Kubernetes 作業負荷用に作成された保護計画は編集または削除できません。

Kubernetes 作業負荷用に作成された保護計画はカスタマイズできません。

バックアップの構成

NetBackup では、スナップショットのみとスナップショットからのバックアップという 2 種類のバックアップジョブを Kubernetes 作業負荷で実行できます。Kubernetes Operator のバックアップジョブを構成する手順に従ってください。

Kubernetes 作業負荷でバックアップを実行するには

- 1 左側で[保護 (Protection)]、[保護計画 (Protection plans)]、[追加 (Add)]の順にクリックします。
- 2 [基本プロパティ (Basic properties)]で、[名前 (Name)]と[説明 (Description)]を入力し、[作業負荷 (Workload)]ドロップダウンリストから[Kubernetes]を選択します。
- 3 [次へ (Next)]をクリックします。[スケジュール (Schedules)]で、[スケジュールの追加 (Add schedule)]をクリックします。
[バックアップスケジュールの追加 (Add backup schedule)]タブで、バックアップとスナップショットを保持するためのオプションを構成できます。
- 4 [反復 (Recurrence)]ドロップダウンから、バックアップの頻度を指定します。
- 5 [スナップショットとバックアップコピー (Snapshot and backup copy)]オプションで、以下のいずれかを行います。
 - 保護計画のスナップショットからのバックアップを構成するには、[スナップショットからバックアップを作成 (Create backup from snapshot)]オプションを選択します。[バックアップの保持期間 (Keep backup for)]ドロップダウンを使用して、スナップショットからのバックアップの保持期間を指定します。

メモ: Kubernetes 作業負荷でサポートされるのは、完全バックアップのスケジュールのみです。バックアップ期間は、時間、日、週、月、年単位で設定できます。デフォルトでは、4 週間がバックアップの保持期間です。

メモ: バックアップコピーのレプリケーションと複製のオプションを有効にするには、[スナップショットからバックアップを作成 (Create backup from snapshot)] オプションを選択する必要があります。

- [スナップショットからバックアップを作成 (Create backup from snapshot)] オプションを選択しなかった場合、デフォルトでは、バックアップジョブを実行するために [スナップショットのみのストレージ (Snapshot only storage)] バックアップが構成されます。
 - バックアップのレプリカコピーを作成するには、[スナップショットからバックアップのレプリカコピー (自動イメージレプリケーション) を作成 (Create a replica copy (Auto Image Replication) of the backup from snapshot)] オプションを選択します。
 - バックアップの複製コピーを作成するには、[スナップショットからバックアップの複製コピーを作成 (Create a duplicate copy of the backup from snapshot)] オプションを選択します。
- 6 『NetBackup Web UI 管理者ガイド』の「保護計画の管理」セクションにある説明に従って、[開始時間帯 (Start window)] タブでスケジュールの作成を続行します。
- 7 『NetBackup Web UI 管理者ガイド』の「保護計画の管理」セクションにある説明に従って、スナップショットからのバックアップ用に [ストレージオプション (Storage options)] の設定を続行します。
- [スナップショットからのバックアップ (Backup from Snapshot)] オプションにストレージを選択する場合、選択したストレージユニットには NetBackup バージョン 10.0 以降のメディアサーバーが必要です。
 - ストレージを管理するメディアサーバーには、選択した Kubernetes クラスタへのアクセス権が必要です。
 - メディアサーバーは API サーバーに接続する必要があります。メディアサーバーからのアウトバウンド接続のために、API サーバーに対応するポートを開く必要があります。datamover ポッドはメディアサーバーに接続する必要があります。

自動イメージレプリケーション (AIR) と複製の構成

1 つの NetBackup ドメインで生成されたバックアップを、1 つ以上のターゲット NetBackup ドメインのストレージにレプリケートできます。この処理は自動イメージレプリケーション (AIR) と呼ばれます。

NetBackup Kubernetes は、ある NetBackup ドメインのメディアサーバー重複排除プール (MSDP) から、別のドメインのメディアサーバー重複排除プール (MSDP) への自動イメージレプリケーションをサポートします。NetBackup は、A.I.R. 操作を管理するソースドメインとターゲットドメインでストレージライフサイクルポリシー (SLP) を使用します。

自動イメージレプリケーションの構成について詳しくは、『NetBackup™ 管理者ガイド Vol. 1』の「NetBackup のレプリケーションについて」の章を参照してください。

メモ: Kubernetes AIR 構成には、バージョン 10.0.1 以降の NetBackup プライマリサーバーとメディアサーバーが必要です。

Kubernetes バックアップの自動イメージレプリケーション (AIR) と複製を構成するには

- 2 台の NetBackup プライマリサーバー間で、自動イメージレプリケーションを構成します。
 - ドメイン間の操作のために、2 台のプライマリサーバー間の信頼関係を確立します。
 - ソースプライマリサーバーにログオンし、左側の[ホスト (Hosts)]、[ホストプロパティ (Host properties)] をクリックして、ソースプライマリサーバーとターゲットプライマリサーバー間の接続を構築します。
 - [ホスト (Hosts)] タブからソースプライマリサーバーを選択し、[接続 (Connect)] をクリックします。
 - ソースサーバーを追加するには、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]、[サーバー (Servers)]、[信頼できるプライマリサーバー (Trusted primary servers)]、[追加 (Add)] をクリックします。
 - [認証局の検証 (Validate Certificate Authority)] ボタンをクリックし、[次へ (Next)] をクリックして認証局の検証に進みます。
 - 信頼できるプライマリサーバーを作成するには、次の 2 つのオプションがあります。
 - [信頼できるプライマリサーバーの認証トークンの指定 (Specify authentication token of the trusted primary server)] を選択して既存のトークンを追加するか、ソースプライマリサーバーに新しいトークンを作成します。

- [信頼できるプライマリサーバーのクレデンシャルの指定 (Specify credentials of the trusted primary server)]を選択して、ソースプライマリサーバーのユーザークレデンシャルを追加します。
 - [信頼を作成 (Create trust)]をクリックします。
ホストプロパティのデータベースが正常に更新されます。
 - [保存 (Save)]をクリックします。
- 2 ソースプライマリサーバーでメディアサーバー重複排除プール (MSDP) ストレージを構成し、MSDP ディスクプールにレプリケーションターゲットを追加します。
 - 左側で[ストレージ (Storage)]、[ストレージ構成 (Storage configuration)]の順にクリックします。
 - MSDP ストレージとディスクプールを追加します。
 - [ディスクプール (Disk pool)]、[追加 (Add)]の順にクリックして、レプリケーションターゲットを追加します。
 - 信頼できるプライマリサーバーとターゲットストレージサーバーを選択します。
 - [ユーザー名 (Username)]フィールドと[パスワード (Password)]フィールドに、レプリケーションターゲットサーバーのユーザークレデンシャルを追加します。
 - [追加 (Add)]をクリックします。
- 3 ターゲットプライマリサーバーでインポート操作を使用して SLP を作成します。
 - 左側で[ストレージ (Storage)]、[ストレージライフサイクルポリシー (Storage lifecycle policy)]、[+ 追加 (+ Add)]の順にクリックします。
 - [ストレージライフサイクルポリシー名 (Storage lifecycle policy name)]フィールドにポリシー名を入力し、[追加 (Add)]をクリックします。
 - [新規操作 (New operations)]、[プロパティ (Properties)]、[操作 (Operation)]で、リストから[インポート (Import)]オプションを選択します。
 - [宛先ストレージの属性 (Destination storage attributes)]、[宛先ストレージ (Destination storage)]で、リストから MSDP ストレージユニットを選択します。
 - [作成 (Create)]をクリックします。
- 4 [スナップショットからバックアップを作成 (Create backup from snapshot)]オプションを指定して Kubernetes 保護計画を作成し、レプリケーションコピーオプションを有効にします。
左側で[Kubernetes]作業負荷、[保護計画 (Protection plan)]、[スケジュール (Schedules)]、[バックアップスケジュールの追加 (Add backup schedule)]の順にクリックします。

- 5 [スナップショットとバックアップコピーのオプション (Snapshot and backup copy options)]セクションで[スナップショットからバックアップを作成 (Create backup from snapshot)]オプションを選択して、レプリケーションおよび複製コピーのオプションを有効にします。
- 6 [スナップショットからバックアップのレプリカコピー (自動イメージレプリケーション)を作成 (Create a replica copy (Auto Image Replication) of the backup from snapshot)]オプションを選択し、レプリカコピーを保持する期間を設定します。

メモ: 自動イメージレプリケーションは、信頼できる NetBackup プライマリサーバーでのみ作成できます。

- 7 [スナップショットからバックアップの複製コピーを作成 (Create a duplicate copy of the backup from snapshot)]オプションを選択し、複製コピーを保持する期間を設定します。
- 8 [追加 (Add)]をクリックします。
- 9 『NetBackup Web UI 管理者ガイド』の「保護計画の管理」セクションにある説明に従って、[開始時間帯 (Start window)]タブでスケジュールの作成を続行します。
- 10 [次へ (Next)]をクリックします。
- 11 [ストレージオプション (Storage options)]タブで、スナップショットからのバックアップ、レプリケート、または複製を行うストレージユニットを選択します。

メモ: スナップショットと複製からのバックアップでは、単純なストレージユニットを追加できます。ただし、レプリケーションの場合は、インポートストレージライフサイクルポリシー (SLP) を使用して、信頼できるストレージユニットを追加する必要があります。

- 12 選択したバックアップオプションの右側にある[編集 (Edit)]をクリックして、バックアップ用に選択したストレージユニットを変更します。
 - レプリカコピーオプションの場合は、[レプリケーションターゲットの選択 (select replication target)]ダイアログでレプリケーションコピー用のプライマリサーバーを選択し、[次へ (Next)]をクリックします。
 - [ストレージライフサイクルポリシーの選択 (Select storage lifecycle policy)]ダイアログで、信頼できるサーバーで定義されているインポートストレージライフサイ

イクルポリシーを選択し、[選択したレプリケーションターゲットを使用 (Use selected replication target)]をクリックします。

- 13 [完了 (Finish)]をクリックして、レプリケーションまたは複製コピーによる保護計画を作成します。

レプリケーションおよび複製コピーの詳細を確認します。

ストレージユニットの構成

保護計画では、すべての形式のストレージユニットをバックアップ用に構成できます。

メモ: バックアップジョブでは、ストレージライフサイクルポリシー (SLP) でサポートされるすべてのストレージ形式がサポートされます。

ストレージユニットをバックアップ用に構成するには

- 1 左側で[ストレージ (Storage)]タブの[ストレージ構成 (Storage configuration)]をクリックします。
- 2 [ストレージユニット (Storage unit)]タブをクリックし、[+ 追加 (+ Add)]をクリックして、ストレージユニットの構成を追加します。
- 3 リストからストレージの形式を選択し、[開始 (Start)]をクリックします。
- 4 [名前 (Name)]フィールドにストレージユニット名を入力します。
- 5 [最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)]フィールドで、バックアップジョブの最大数を選択します。
- 6 [最大フラグメントサイズ (Maximum fragment size)]フィールドで、ストレージユニットのフラグメントサイズの最大数を選択し、[次へ (Next)]をクリックします。
- 7 [ディスクプール (Disk pool)]で、ストレージユニットで使用するディスクプールを選択し、[次へ (Next)]をクリックします。
- 8 [オンデマンドのみ (On demand only)]オプションはストレージユニットがオンデマンドで排他的に利用可能かどうかを指定します。このストレージユニットを使用するためにポリシーまたはスケジュールを明示的に構成する必要があります。
- 9 [メディアサーバー (Media servers)]タブで、使用するメディアサーバーを選択し、[次へ (Next)]をクリックします。NetBackup がメディアサーバーを自動で選択するか、ラジオボタンを使用してメディアサーバーを手動で選択できます。
 - すべてのメディアサーバーが NetBackup バージョン 10.0 以降である必要があります
 - ストレージを管理するすべてのメディアサーバーには、選択した Kubernetes クラスタへのアクセス権が必要です。

- メディアサーバーは API サーバーに接続できる必要があります。メディアサーバーからのアウトバウンド接続のために、API サーバーに対応するポートを開く必要があります。datamover ポッドはメディアサーバーに接続できる必要があります。

10 ストレージユニットの設定を確認し、[保存 (Save)]をクリックします。

Kubernetes 資産のリカバリ

この章では以下の項目について説明しています。

- [リカバリポイントの検索と検証](#)
- [スナップショットからのリストア](#)
- [バックアップコピーからのリストア](#)

リカバリポイントの検索と検証

NetBackup バージョン 10.0 以降では、スナップショットからのリストア操作とバックアップコピーからのリストア操作による **Kubernetes** 資産のリカバリをサポートしています。

メモ:リカバリ後、新しく作成された名前空間、永続ボリューム、その他のリソースには、新しいシステム生成 UID が割り当てられます。

NetBackup は、**Kubernetes** 作業負荷のバックアップコピーの完了状態または未完了状態を通じてバックアップイメージの検証を実行するのに役立ちます。NetBackup では、未完了のバックアップコピーからリストア操作を実行できません。

Kubernetes 名前空間に対応するリカバリポイントは、複数のイメージで構成されます。一部のイメージのコピーが利用できない可能性があるため、リカバリポイントは未完了である可能性があります。このようなリカバリポイントは未完了としてマークされます。

リカバリポイントの検証を実行するには

- 1 左側の[作業負荷 (Workloads)]で、[**Kubernetes**]をクリックします。
- 2 [名前空間 (Namespaces)]タブで、リカバリする資産の名前空間をクリックします。

- 3 [リカバリポイント (Recovery points)] タブをクリックします。
- 4 [リカバリポイント (Recovery points)] タブには、すべてのリカバリポイントがバックアップの日時およびコピーとともに表示されます。

リカバリポイントの横にあるコピー数のボタンをクリックすると、場所、デフォルトのコピー、コピーの種類、完了状態が表示されます。

完了状態は、リストア操作を実行するために選択したリカバリポイントを検証するのに役立ちます。

未完了のバックアップコピー、進行中のバックアップ、イメージの期限切れ、ハードウェア障害、またはネットワーク通信の問題には、複数の理由が考えられます。

スナップショットからのリストア

NetBackup は、単一のリストアジョブを使用して、リカバリポイントでのすべてのバックアップイメージをリストアできる、スナップショットからのリストア機能を備えています。NetBackup Web UI でスナップショットからのリストアジョブを表示できます。

スナップショットからのリストアを実行するには

- 1 左側の [作業負荷 (Workloads)] で、[Kubernetes] をクリックします。
- 2 [名前空間 (Namespace)] タブで、リカバリする資産の名前空間をクリックします。[リカバリポイント (Recovery points)] タブをクリックします。

- 3 [リカバリポイント (Recovery points)] タブには、すべてのリカバリポイントがバックアップの日時およびコピーとともに表示されます。フィルタを設定して、表示されたリカバリポイントをフィルタ処理できます。[日付 (Date)] 列の日付をクリックすると、リカバリポイントの詳細が表示されます。[リカバリポイントの詳細 (Recovery points details)] ダイアログには、ConfigMap、Secret、永続ボリューム、ポッドなど、バックアップされたリソースが表示されます。これらのリソースについては、<https://kubernetes.io/docs/reference/kubernetes-api/> を参照してください。

メモ: NetBackup Web UI では、Kubernetes 資産の [リカバリポイント (Recovery points)] タブで新しい列 [コピー (Copies)] が追加されました。この列には、コピーの総数が表示されます。

メモ: デフォルトでは、NetBackup バージョン 10.0 を新しくインストールした場合、[コピー (Copies)] 列が表示されます。

NetBackup プライマリサーバーがバージョン 9.1 から 10.0 にアップグレードされた場合やすでに [リカバリポイント (Recovery points)] タブにアクセスしたことがある既存のユーザーの場合は、[コピー (Copies)] 列が表示されません。

メモ: [コピー (Copies)] 列の表示は、[リカバリポイント (Recovery points)] ページにある [列を表示または非表示 (Show or hide columns)] オプションを使用して有効にできます。

- 4 [コピー (Copies)] をクリックし、スナップショット形式とリストアする完全コピーが設定されているリカバリポイントの行にある省略記号メニュー (3 つのドット) をクリックします。
- 5 [リカバリターゲット (Recovery target)] ページに、ターゲットクラスタが自動入力されます。

メモ: 代替クラスタのリストアは、スナップショットコピーではサポートされません。

- 6 [宛先名前空間を指定 (Specify destination namespace)] で、次のいずれかのリストアオプションを選択します。
- バックアップされた元の名前空間をリストアに使用する場合は [元の名前空間を使用 (Use original namespace)]。デフォルトでは、このオプションが選択されています。
 - リストアに代替名前空間を使用する場合は [代替名前空間を使用 (Use alternate namespace)]。その後、[次へ (Next)] をクリックします。

- 7 [リカバリするリソース形式の選択 (Select resource types to recover)]で、次のいずれかのリストアするリソース形式を選択します。
- すべてのリソース形式をリカバリする場合は[すべてのリソース形式 (All resource types)]。デフォルトでは、このオプションが選択されています。
 - 選択したリソース形式のみをリカバリする場合は[選択されたリソース形式のリカバリ (Recover selected resource types)]。

メモ: [リカバリするリソース形式の選択 (Select resource types to recover)]オプションは、上級ユーザー向けです。リストアするリソースの選択に注意しないと、リストア後に完全に機能する名前空間が得られない場合があります。

- 8 [リカバリする永続ボリューム要求の選択 (Select Persistent volume claims to recover)]で、次のいずれかのリカバリする永続ボリューム要求を選択します。
- すべての永続ボリューム要求をリカバリする場合は[すべての永続ボリューム要求 (All Persistent volume claims)]。デフォルトでは、このオプションが選択されています。
 - 選択した永続ボリューム要求をリカバリする場合は[選択された永続ボリューム要求のリカバリ (Recover selected Persistent volume claims)]。

メモ: [選択された永続ボリューム要求のリカバリ (Recover selected Persistent volume claims)]でオプションを選択せずに[次へ (Next)]をクリックした場合、[リカバリオプション (Recovery Options)]セクションで永続ボリューム要求は空になり、永続ボリューム要求はリストアされません。

[選択された永続ボリューム要求のリカバリ (Recover selected persistent volume claims)]でオプションを選択せずに[次へ (Next)]をクリックした場合、[リカバリオプション (Recovery options)]セクションで永続ボリューム要求は空になり、永続ボリューム要求はリストアされません。

メモ: [永続ボリュームのみリストア (Restore only persistent volume)]を使用すると、選択した永続ボリューム要求で、永続ボリュームのみをリストアするよう切り替えることができます。これにより、対応する永続ボリューム要求が作成されることはありません。

- 9 [エラー戦略 (Failure strategy)]セクションをクリックして、リカバリのためのエラー戦略オプションを表示します。
- 10 [リカバリのためのエラー戦略を選択 (Select failure strategy to recover)]で、次のリカバリのためのエラー戦略のいずれかを選択します。

メモ: メタデータまたは PVC のリストア中にエラーが発生すると、選択したエラー戦略に従ってリストアジョブが実行されます。

- [即座に終了 (**Fail Fast**)]を選択すると、エラーが発生した場合にリストアを終了します。
 - [先に進む (**Proceed Ahead**)]を選択すると、次の PVC のリストアを続行します。親イメージ (最初のイメージ) のリストアが失敗した場合、リストアジョブは終了します。
 - [再試行 (**Retry**)]を選択すると、メタデータまたは PVC リストアの再試行回数を指定できます。再試行後もリストアが失敗した場合は、リストアジョブが終了します。
-

メモ: 選択したエラー戦略がアクティビティモニターに表示されます。

- 11 [次へ (**Next**)]をクリックします。
 - 12 [リカバリオプション (**Recovery options**)]ページで、[リカバリの開始 (**Start recovery**)]をクリックしてリカバリのエントリーを送信します。
 - 13 [アクティビティモニター (**Activity monitor**)]タブで、[ジョブ ID (**Job ID**)]をクリックし、リストアジョブの詳細を表示します。
-

メモ: NetBackup Kubernetes のリストアでは、単一ジョブを使用してすべての永続ボリューム要求と 1 つの名前空間をリストアします。[アクティビティモニター (**Activity monitor**)]でログを表示して、リストアされる永続ボリューム、永続ボリューム要求、またはメタデータを追跡できます。

バックアップコピーからのリストア

NetBackup 10.0 以降では、バックアップコピーからリストアできます。スナップショットからのリストアで説明したのと同じ手順に従い、コピー形式として[バックアップ (**Backup**)]を選択します。代替ターゲットクラスタにもリストアできます。

バックアップコピーからリストアするには

- 1 左側の[作業負荷 (**Workloads**)]で、[Kubernetes]をクリックします。
- 2 [名前空間 (**Namespace**)]タブで、リカバリする資産の名前空間をクリックします。[リカバリポイント (**Recovery points**)]タブをクリックします。

- 3 [リカバリポイント (Recovery points)] タブには、すべてのリカバリポイントがバックアップの日時およびコピーとともに表示されます。フィルタを設定して、表示されたリカバリポイントをフィルタ処理できます。[日付 (Date)] 列の日付をクリックすると、リカバリポイントの詳細が表示されます。[リカバリポイントの詳細 (Recovery points details)] ダイアログには、ConfigMap、Secret、永続ボリューム、ポッドなど、バックアップされたリソースが表示されます。これらのリソースについては、<https://kubernetes.io/docs/reference> を参照してください。

メモ: NetBackup Web UI では、Kubernetes 資産の [リカバリポイント (Recovery points)] タブで新しい列 [コピー (Copies)] が追加されました。この列には、コピーの総数が表示されます。

メモ: デフォルトでは、NetBackup バージョン 10.0 を新しくインストールした場合、[コピー (Copies)] 列が表示されます。

ただし、NetBackup プライマリサーバーがバージョン 9.1 から 10.0 にアップグレードされた場合や、すでに [リカバリポイント (Recovery points)] タブにアクセスしたことがある既存のユーザーの場合は、[コピー (Copies)] 列が表示されません。

メモ: [コピー (Copies)] 列の表示は、[リカバリポイント (Recovery points)] ページにある [列を表示または非表示 (Show or hide columns)] オプションを使用して有効にできます。

- 4 [コピー (Copies)] をクリックし、バックアップ形式とリストアする完全コピーが設定されているリカバリポイントの行にある省略記号メニュー (3 つのドット) をクリックします。
- 5 [リカバリターゲット (Recovery target)] ページで、資産を同じソースクラスタにリカバリすることが自動的に入力されます。[次へ (Next)] をクリックします。
- 6 [宛先名前空間を指定 (Specify destination namespace)] で、次のいずれかのリストアオプションを選択します。
- [元の名前空間を使用 (Use original namespace)] を選択して、元の名前空間を使用します。デフォルトでは、このオプションが選択されています。
 - [代替名前空間を使用 (Use alternate namespace)] を選択して、代替名前空間を入力し、[次へ (Next)] をクリックします。
- 7 [リカバリするリソース形式の選択 (Select resource types to recover)] で、次のいずれかのリストアするリソース形式を選択します。
- すべてのリソース形式をリカバリする場合は [すべてのリソース形式 (All resource types)]。デフォルトでは、このオプションが選択されています。

- 選択したリソース形式のみをリカバリする場合は[選択されたリソース形式のリカバリ (Recover selected resource types)]。
- 8 [リカバリする永続ボリューム要求の選択 (Select Persistent volume claims to recover)]で、次のいずれかのリカバリする永続ボリューム要求を選択します。
- すべての永続ボリューム要求をリカバリする場合は[すべての永続ボリューム要求 (All Persistent volume claims)]。デフォルトでは、このオプションが選択されています。
 - 選択した永続ボリューム要求をリカバリする場合は[選択された永続ボリューム要求のリカバリ (Recover selected Persistent volume claims)]。

メモ: [選択された永続ボリューム要求のリカバリ (Recover selected Persistent volume claims)]でオプションを選択せずに[次へ (Next)]をクリックした場合、[リカバリオプション (Recovery Options)]セクションで永続ボリューム要求は空になり、永続ボリューム要求はリストアされません。

[選択された永続ボリューム要求のリカバリ (Recover selected persistent volume claims)]でオプションを選択せずに[次へ (Next)]をクリックした場合、[リカバリオプション (Recovery options)]セクションで永続ボリューム要求は空になり、永続ボリューム要求はリストアされません。

メモ: [永続ボリュームのみリストア (Restore only persistent volume)]を使用すると、選択した永続ボリューム要求で、永続ボリュームのみをリストアするよう切り替えることができます。これにより、対応する永続ボリューム要求が作成されることはありません。

- 9 [エラー戦略 (Failure strategy)]セクションをクリックして、リカバリのためのエラー戦略オプションを表示します。
- 10 [リカバリのためのエラー戦略を選択 (Select failure strategy to recover)]で、次のリカバリのためのエラー戦略のいずれかを選択します。

メモ: メタデータまたは PVC のリストア中にエラーが発生すると、選択したエラー戦略に従ってリストアジョブが実行されます。

- [即座に終了 (Fail Fast)]を選択すると、エラーが発生した場合にリストアを終了します。
- [先に進む (Proceed Ahead)]を選択すると、次の PVC のリストアを続行します。親イメージ (最初のイメージ) のリストアが失敗した場合、リストアジョブは終了します。

- [再試行 (Retry)]を選択すると、メタデータまたは PVC リストアの再試行回数を指定できます。再試行後もリストアが失敗した場合は、リストアジョブが終了しません。

メモ: 選択したエラー戦略がアクティビティモニターに表示されます。

- [次へ (Next)]をクリックします。
- 11 [リカバリの開始 (Start recovery)]をクリックしてリカバリのエントリを送信します。
 - 12 [アクティビティモニター (Activity monitor)]タブで、[ジョブ ID (Job ID)]をクリックし、リストアジョブの詳細を表示します。
 - 13 [ジョブの詳細 (Job Details)]ページで[詳細 (Details)]タブをクリックすると、リストアジョブのシーケンス (リストア前、データの移動、リストア後のジョブ) が表示されます。

メモ: NetBackup Kubernetes のリストアでは、単一ジョブを使用してすべての永続ボリューム要求と 1 つの名前空間をリストアします。[アクティビティモニター (Activity monitor)]でログを表示して、リストアされる永続ボリューム、永続ボリューム要求、またはメタデータを追跡できます。

メモ: NetBackup バージョン 10.0 では、リストアジョブの取り消しがサポートされていません。

メモ: NetBackup バージョン 10.0 以降は、バックアップコピーからのリストアジョブのみで代替クラスタのリストアをサポートします。クラスタ上のオブジェクトのバージョンが異なることが原因で、代替クラスタへのリストアが部分的に失敗する場合があります。

Kubernetes の問題のトラブルシューティング

この章では以下の項目について説明しています。

- プライマリサーバーのアップグレード時のエラー: **NBCheck** が失敗する
- 古いイメージのリストア時のエラー: 操作が失敗する
- 永続ボリュームのリカバリ **API** でのエラー
- リストア中のエラー: ジョブの最終状態で一部が失敗していると表示される
- 同じ名前空間でのリストア時のエラー
- **datamover** ポッドが **Kubernetes** のリソース制限を超過
- リストア時のエラー: 高負荷のクラスタでジョブが失敗する
- 特定のクラスタ用に作成されたカスタムの **Kubernetes** の役割でジョブを表示できない
- **OperatorHub** からインストールされたアプリケーションのリストア時に、選択されていない空の **PVC** が **Openshift** によって作成される

プライマリサーバーのアップグレード時のエラー: NBCheck が失敗する

NetBackup プライマリサーバーのバージョン 9.1 から 10.0 へのアップグレードが失敗し、重要でない **NBCheck** エラーが発生します。

エラーメッセージ: テストにより、**{{ポリシーの数}}** 個の有効な **Kubernetes** ポリシーが見つかりました。**NetBackup** インスタンスに有効な **Kubernetes** ポリシーがある場合、この

テストは失敗します。(The test found {{no. of policies}} active Kubernetes policy. This test fails if the NetBackup instance has any active Kubernetes policies.)

推奨処置: NetBackup をバージョン 10.0 にアップグレードする前に、プライマリサーバーで有効な Kubernetes ポリシーをすべて無効にします。

詳しくは、<https://www.veritas.com/content/support> を参照してください。

古いイメージのリストア時のエラー: 操作が失敗する

NetBackup 9.1 バージョンを使用して作成された古いイメージでは、Kubernetes のリストア操作が失敗します。

エラーメッセージ: 10.0 より前のバージョンの NetBackup のバックアップイメージでは、リストア操作はサポートされません。(Restore operation is not supported on the backup images of NetBackup older than 10.0 version.)

推奨処置: Velero コマンドを使用して古いイメージをリストアします。Velero は、安全にバックアップとリストアを行い、ディザスタリカバリを実行し、Kubernetes クラスタリソースと永続ボリュームを移行するためのオープンソースツールです。そのため、Velero から古いイメージをリストアするには、インストールがクラスタでの前提条件です。

NetBackup 管理者の Web UI からバックアップ名またはバックアップ ID を取得し、それを Velero コマンドで使用してリストアします。

詳しくは、<https://www.veritas.com/content/support> を参照してください。

永続ボリュームのリカバリ API でのエラー

NetBackup Kubernetes Operator バージョン 10.0 では、永続ボリュームのリカバリ API が削除され、サポートされません。NetBackup の古いバージョンでは、永続ボリュームのリストアにこの API が使用されていました。そのため、NetBackup 10.0 バージョンにアップグレードした場合、永続ボリュームのリカバリ API を使用してリストアすると、リストア操作は失敗します。

エラーメッセージ: NetBackup の Kubernetes リカバリ処理の再設計に伴い、Kubernetes 永続ボリュームのリカバリ API は使用できなくなり、製品から削除されました。(Kubernetes persistent volume recovery API is no longer in use and has been removed from the product due to redesign at NetBackup Kubernetes recovery process.)

推奨処置: NetBackup Kubernetes Operator バージョン 10.0 では、選択したリソースをバックアップからリカバリするように NetBackup がアップグレードされています。したがって、永続ボリュームまたは永続ボリューム要求をリカバリする場合は、NetBackup から永続ボリュームを選択し、宛先名前空間にリカバリできます。

詳しくは、<https://www.veritas.com/content/support> を参照してください。

リストア中のエラー: ジョブの最終状態で一部が失敗していると表示される

リストアジョブの最終状態で一部が失敗しており、リソース `RoleBinding` に固有の警告がいくつか表示されます。

表示される警告は、API グループ `groupauthorization.openshift.io` と `rbac.authorization.kubernetes.io` のリソース `RoleBinding` に固有です。

`RoleBinding` は、コントローラを使用して自動管理され、新しい名前空間を作成するときに作成されるためです。

推奨処置: 関連する `RoleBinding` リソースをリストアから除外するか、作成された警告を無視できます。

同じ名前空間でのリストア時のエラー

選択した `PVC` が名前空間にすでに存在する場合、元の名前空間に `PVC` をリストアすると失敗することがあります。

推奨処置:

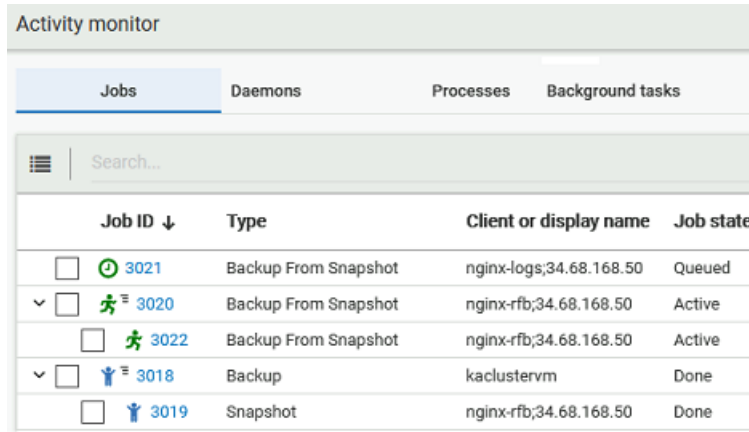
- 代替名前空間のリストアを使用できます。
- [リカバリオプション (`Recovery option`)]で、リストア操作の実行中に既存の `PVC` と重複していない `PVC` を選択できます。

datamover ポッドが Kubernetes のリソース制限を超過

`NetBackup` は、2 つのリソース制限プロパティを使用して、Kubernetes 作業負荷における実行中のバックアップジョブの合計数を制御します。`NetBackup` バージョン 10.0 では、`datamover` ポッドが Kubernetes クラスタごとに設定されたリソース制限[バックアップ]と[スナップショットからのバックアップ]を超過します。

リソース制限の問題の例

例 1



The screenshot shows the 'Activity monitor' interface with a table of jobs. The table has columns for Job ID, Type, Client or display name, and Job state. There are five rows of data, with some jobs expanded to show sub-jobs.

Job ID ↓	Type	Client or display name	Job state
<input type="checkbox"/> 3021	Backup From Snapshot	nginx-logs;34.68.168.50	Queued
▼ <input type="checkbox"/> 3020	Backup From Snapshot	nginx-rfb;34.68.168.50	Active
<input type="checkbox"/> 3022	Backup From Snapshot	nginx-rfb;34.68.168.50	Active
▼ <input type="checkbox"/> 3018	Backup	kaclustervm	Done
<input type="checkbox"/> 3019	Snapshot	nginx-rfb;34.68.168.50	Done

Kubernetes クラスタあたりのスナップショットからのバックアップジョブのリソース制限は 1 に設定されています。

ジョブ ID 3020 と 3021 は、スナップショットからのバックアップの親ジョブです。datamover ポッドとそのクリーンアッププロセスの作成は、バックアップジョブのライフサイクルに含まれています。

ジョブ ID 3022 は子ジョブで、クラスタからストレージユニットへのデータ移動が行われま

す。
リソース制限の設定に基づき、ジョブ ID 3022 は実行状態であるのに対し、ジョブ ID 3021 はキューに投入された状態のままになります。バックアップジョブ ID 3022 が完了すると、親ジョブ ID 3021 が開始されます。

datamover ポッドをクリーンアップし、親ジョブ ID 3020 のライフサイクルを完了するプロセスを進めているため、ジョブ ID 3020 がまだ進行中であることに注意してください。

例 2

Job ID ↓	Type	Client or display name	Job state
<input type="checkbox"/> 3021	Backup From Snapshot	nginx-logs;34.68.168.50	Active
<input checked="" type="checkbox"/> 3020	Backup From Snapshot	nginx-rfb;34.68.168.50	Active
<input type="checkbox"/> 3022	Backup From Snapshot	nginx-rfb;34.68.168.50	Done
<input checked="" type="checkbox"/> 3018	Backup	kaclustervm	Done
<input type="checkbox"/> 3019	Snapshot	nginx-rfb;34.68.168.50	Done

この段階で、NetBackup Kubernetes Operator が配備されている名前空間で 2 つの **datamover** ポッドが同時に実行されている場合があります。ジョブ ID 3020 の一環として作成された **datamover** ポッドはまだクリーンアップされていませんが、ジョブ 3021 の **datamover** ポッドの作成を開始しました。

スナップショットからのバックアップジョブが複数トリガされるビジー状態の環境では、リソース制限値を低く設定すると、バックアップジョブはほとんどの時間、キューに投入された状態になる可能性があります。

ただし、リソース制限の設定を高くすると、**datamover** ポッドがリソース制限で指定された数を超える場合があります。これにより、**Kubernetes** クラスタでリソースが不足する可能性があります。

3022 などのデータ移動ジョブは並行して実行されますが、クリーンアップアクティビティは順次処理されます。これは、**datamover** リソースのクリーンアップにかかる時間と組み合わせたとときに、**PVC** または名前空間データのバックアップにかかる時間に近づくと、ジョブの完了がさらに遅延することになります。

データ移動とリソースのクリーンアップの合計時間がバックアップジョブと同じ場合、その後、永続ボリュームまたは名前空間データのバックアップジョブによって、ジョブの完了が遅れる可能性があります。

推奨処置: システムのリソースとパフォーマンスを確認し、それに応じてリソース制限値を設定します。この測定は、すべてのバックアップジョブで最高のパフォーマンスを実現するのに役立ちます。

リストア時のエラー: 高負荷のクラスタでジョブが失敗する

高負荷の **Kubernetes** クラスタではリストアジョブが失敗します。

エラーメッセージ: ERR - VxMS を初期化できません。ソケットにデータを書き込めません。peer により接続がリセットされました。(ERR - Unable to initialize VxMS, cannot write data to socket, Connection reset by peer.)

クライアント cluster.sample.domain.com のエラー bpbrm (pid=712755): ERR - VxMS を初期化できません。(Error bpbrm (pid=712755) from client cluster.sample.domain.com: ERR - Unable to initialize VxMS.)

エラー bptm (pid=712795) ソケットにデータを書き込めません。peer により接続がリセットされました。(Error bptm (pid=712795) cannot write data to socket, Connection reset by peer.)

推奨処置: リストア操作中にこの問題が発生した場合は、リストア操作を負荷の小さいクラスタで実行するか、クラスタがアイドル状態のときに実行する必要があります。

特定のクラスタ用に作成されたカスタムの Kubernetes の役割でジョブを表示できない

特定の Kubernetes クラスタで Kubernetes 作業負荷用にカスタムの RBAC の役割が作成されたら、システム管理者は、Kubernetes ジョブを表示する権限を明示的に付与する必要があります。そうしないと、Kubernetes 固有のジョブはすべて、表示されません。

システム管理者が Kubernetes ジョブを表示する権限を付与しない場合、ユーザーが表示できるジョブは次のとおりです。

- 階層表示のリストアジョブのみ。
- 一覧表示のスナップショットジョブとリストアジョブのみ。

作成されたカスタムベースの Kubernetes の役割で特定の Kubernetes クラスタのジョブを表示できない場合、次の手順を実行して表示権限を付与します。

表示権限を付与するには

- 1 左側で[作業負荷 (Workload)]で[Kubernetes]をクリックします。
- 2 右側で[Kubernetes 設定 (Kubernetes setting)]、[権限を管理 (Manage permissions)]の順にクリックします。
- 3 対応する役割の横にある縦型の省略記号をクリックし、[編集 (Edit)]を選択します。
- 4 [権限の編集 (Edit permissions)]で、役割の[編集 (Edit)]権限と[ジョブの表示 (View jobs)]権限を選択し、[保存 (Save)]をクリックします。

Kubernetes のカスタム役割のユーザーは、階層表示と一覧表示の両方で、バックアップジョブ、スナップショットジョブ、リストアジョブ、スナップショットからのバックアップジョブを表示できるようになります。

想定:

OperatorHub からインストールされたアプリケーションのリストア時に、選択されていない空の PVC が Openshift によって作成される

- 設定がアップグレードされると、ユーザーは次のものを表示できます。
 - 階層表示にある、既存のジョブからのリストアジョブのみ。
 - 一覧表示にある、既存のジョブからのスナップショットジョブとリストアジョブのみ。
- 選択した Kubernetes クラスタに対する権限を指定して Kubernetes のカスタム役割が作成されると、ユーザーはスナップショットジョブのみで操作をキャンセルおよび再開できます。

OperatorHub からインストールされたアプリケーションのリストア時に、選択されていない空の PVC が Openshift によって作成される

アプリケーションが OperatorHub カタログソースを介してインストールされる Openshift 環境では、ユーザーが、そのようなアプリケーション名前空間のバックアップから選択した PVC のリストアを実行しようとした場合、代わりにすべての PVC が作成されます。

この問題は、Openshift 環境では、リストア先の名前空間に必要なサイズで、選択されていない PVC がプロビジョニングされるために発生します。

メモ: このようなアプリケーションでは、ユーザーがリストア対象として PVC を選択しなくても、配備の構成に従って PVC は自動プロビジョニングされます。
